それは、果たして親愛からの忠告なのか。
それとも死にゆく彼女の歎きだったのか。

――サヤ、と。

もう何番目の親かも忘れた、亜麻色の髪と、灰青の目をした女性が自分の名を呼ぶ。

―貴女は最初に愛した人とは生きられない―
何故なら。彼女は哀しそうな目をして囁く。
―貴女はその人と、出会う事すら出来ない―

正直、今でもその意味はよくわからない。
―でも忘れないで。貴女は沢山の愛に逢う―
けれどその声があまりに優しかったから……
今だって沙夜は、信じているのだ。

真っ赤な血が飛び散り、沙夜を庇うように抱き締めた誰かが、力無く崩れ落ちた瞬間も。
唯一守りたかった少女が冷たく固くなって、沙夜を見ても笑わなくなったその日も――

―あんた、親に捨てられたんだろ？―
けろりと簡単に、そんな事を口にする性格の悪い青年を、沙夜は平然と睨み返す。
―だったら何なの？―
今までだって何度も、同じ類の無頼漢の声に、沙夜はそう返してきたのだ。
―私は悪くないし、間違った事もしてない―
だから。真っ当に生きる限り、沙夜にだって、
―普通に幸せになる権利、あるはずだもの―

青年はそんな沙夜を。眩しくも痛ましくもあるような、蒼い目で見つめていた。
普通を願う少女に今後訪れる、普通でない日々を知るかのように。

そうして何度、沙夜は心に決めた事だろう。
「今度こそ、新しい家族と仲良く頑張る！」
『狭間（はざま）沙夜（さや）』――新たな後見人で養子先の姓。
なのに居候初日から、既に道は険しかった。

「ちょっと沙夜！　何ぼーっとしてんのよ！」
いきなり、角ばった制鞄を投げつけられた。
教科書、筆記用具が入っているソレは中々、当たり所が悪ければ凶器になりそうなのだが、
「あ、陽美（ようみ）さん――ごめん、なさい」
投げつけた当人はそんなこと、全く考えていないのは確かだ。考えてない相手に文句を言っても始まらないので、沙夜はぐぐっと、顔色を変えないまま憤りを飲み込む。
無造作に腰元まで下ろされた、薄い茶色で真っ直ぐな、長い髪だけは軽く揺らして。

対する相手は、短くて濃い、今時の茶髪を思いっきり揺らして強い怒りを表していた。
そう。この養子先の家の娘の陽美が、突然現れた沙夜に怒りを覚えたって当然なのだ。
「今日から一緒に暮らす事になった沙夜君だ。陽美、仲良くするんだよ」
その、新後見人たる狭間さんの、経緯を全て省いた簡潔な紹介はどうなのかと沙夜も思う。
――いきなり家族とか、どうなってんの！？――陽美も事情は聞かされておらず、沙夜は何故自分がここに引き取られたか検討がつかない。
――そもそも……狭間さんって何者？――
沙夜にわかるのは、多分三、四人目くらいの、何度も入れ替った最新の後見人というだけだ。
それでいいのか私？
否応なく順応力の育った自分に、たまには自分でつっこみを入れる。
「本っ当、気味悪い奴！　何処の馬の骨かもわからないんだから！」
「……」
ここで笑えば、何ヘラヘラしてんのと怒られ、今のように無表情を通せば更に不機嫌になる。どう対応していいか、早くも全くわからない相手に、沙夜は黙り込むしか出来ない。

まぁ……わけがわからないのは、今までの家も似たようなものだったけど。拙い回想を巡らせて沙夜は、何とか気持ちを落ち着ける。
これでもう何度、自分は住む家を変わってきたか――最早数える事すらやめてしまった。
――今までの所とは、うまくやってきたけど――ただしそれは、ある程度家人と距離を置いていたからでもあった。

「アタシ、あんたなんか絶対認めないし！」
だからある意味、こんな形であっても感情をここまでストレートにぶつけられているのは、この狭間家で初めての事だった。
初めてだからといって、有り難いわけでは全くないのだが。

「あの、陽美さん」
「何よ！？」
「明日から学校、何処に行けばいいですか？」
既に高校も最上の学年、しかも年度が替わり一ヶ月強という妙な時期の転校生の沙夜は、目の前の陽美以外、行く先の手掛かりがない。
「知るかそんなの！　勝手に行きなさいよ！」

制鞄を投げつけてきたのは、要するに学校の準備をしておけという事なのはわかる。
—でも……学校まで連れてってくれそうにはないなぁ、このヒト—
おそらく、狭間さんがいる前で尋ねれば、無愛想でも陽美は何とか答えてくれただろう。しかし狭間さんは普段からあまり家に帰ってこないらしく、陽美の母に至っては、沙夜をほぼ完全に無視している状態だ。辛うじて、食事が別に用意されているだけで僥倖だろう。

うーん。ひとまずどうやって学校行こう。
真剣に悩む沙夜を視界の端にして、陽美は面白くなさそうにパソコンに向かっていた。
十畳の洋室内で、ドア側四分の一の片隅に置かれたロフトベッドが、沙夜に与えられた全スペースだ。元々空いていた場所なのだが、だとしても、何の事前相談もなく一人部屋でなくなった陽美の不快感も、理解は出来た。
—それとこれとは、話が別だけど……—
今や誰もが、一人一つは持っていて当然の、文明の利器たるパソコンやスマートフォン等、沙夜は何一つ情報通信機器を持っていない。小学生すら当たり前に持っているこの時代に。
—そういうの持ってたら、学校とかある場所すぐにわかるっていうけど—
今の沙夜に出来るのは、陽美についていくか、人に尋ねるしかないが——手続きの時に車で一度行っただけで、高校の名前も記憶にない転校慣れぶりには笑うしかなかった。

＊

そして案の定。
かなり朝の強い沙夜以上に、根性で早起きしたらしい陽美は、翌朝早く消え去っていた。
「……逆に、尊敬するかも」
ここまで露骨に嫌われると、めげるなあ……。
少しでも陽美を信じてみたかった沙夜は、大きく肩を落として呟いていた。
胸元の青い天然石のペンダントも揺れて、養母のその形見を握りしめ、沙夜は息をつく。
—今度こそ、仲良くなりたかったのにな—
少なくとも、別れが寂しくなるくらいには。

これまで暮らしてきたのは、子供のいない老夫婦や、忙しい若夫婦の家庭で、同年代の少女がいるという今回は期待していたのだ。
しかし夢は儚く打ち砕かれ、今や行くべき道も、現実問題さっぱりわからない始末で。
「……えっと。本気で、高校ってどっちよ」
余裕をもって道を尋けるよう、早く出た事が返って裏目に出た。朝早い閑静な住宅街に、出歩く人影はほとんどなく、それもそのはず。小高い丘上のこの辺りでは、大体の通勤人は車を使っていた。
「まさか手当たり次第にインターホン押してきくわけにもいかないし……」
沙夜はとりあえず、最寄の地下鉄の駅までとにかく下りることにしたのだった。

「ああもう……！　地下鉄、小さ過ぎ！」
走る。とにかく必死に沙夜はひたすら走る。
「駅すらすぐに見つからないなんて！」
その上、教えてもらった最寄の高校の位置はその駅と反対方向で――しかもかなり遠く、道もわかりにくかった。
地下鉄に乗ればたった二駅の距離。しかし沙夜には、自由になるお金は全然ないのだ。
「これじゃ本気で遅刻じゃない……！」
転校早々！　恥ずかし！　と、百メートルを最高十秒台後半で走れる足に全力を込める。
といきたいところだが。実際は道々分岐を気にしながらの疾走なので、そうもいかない。
でも、だからこそ。
自分と同じように必死に走っている少女が目に入って――その制服が自分と同じことに気が付く余裕もあったのかもしれない。

「うわーん……！　遅刻ー……！」
寝過ごしたぁぁー！　などと、動揺のあまり周囲も構わず叫んでいるらしい誰かがいた。
「――！　同じ制服――ってことは！」
あの子さえ捕まえれば、まっすぐ目的地まで連れてってもらえるはず！
道を気にしながらの疾走に疲れてきていた沙夜は、ききー！　と止まり、うわぁぁんと慌てている少女の方へ華麗にUターンした。
……が。
「うわぁぁん、転校初日なのにぃぃぃー」
聞かなければ良かった。少女の直前まで来て頼りない真実にすぐ曝された沙夜だった。
「おはよ、ちょっといい？」
「って――あれ――？」
沙夜に気付いて大きな目を丸くする少女に、沙夜は淡々と話しかける。
「ねぇ、あなた私と同じ高校？　悪いけど私、転校したてで道がわからなくって」

「え？　あなたも転校されてきたんですか？」
少女は立ち止り、沙夜の方をじっくりと見た。
「え？　ってことは……迷子、ですか？」
「――そう。あなた、道わかる？」
落ち着いて尋ねる沙夜に、泣きそうな目で、少女は真っ直ぐなポニーテールを揺らし、
「ごめんなさいっ……自信ないですっ……！」
ふぇぇーん……！　と聞こえてきそうな顔で、両手を握り、沙夜をまっすぐ見返していた。
「あー……」
この状態の相手を、先程のように疾走して見捨てていくわけにもいかず。
要するに事態は一層悪くなったわけだが。
「――東高校の生徒さんですか？」
二人が立ち止っていた大通りの交差点の角。開店前とおぼしき花屋から、鉢植えを抱えて出てきた、エプロン姿の華奢な青年がいた。
「――？」
「その制服。この先の市立東高校ですよね？」

にこにこ微笑みながら、くいくいと交差点の先を指差す。沙夜は、何故か軽く――理由のない衝撃を受けた自分にふっと気が付いた。
とても整った顔立ちの青年の、色の薄めな、鋭い短髪はフードパーカーとよく合っている。
「えっ……えっとっ」
「――道、わかるなら教えて」
突然声をかけられ動揺する少女と、淡々と冷静な沙夜に、青年は再び柔らかく微笑み。
「この先は地下鉄の真上の道なので、地上はずっと商店街になります。商店街の南沿いを、ひたすら走れば十分程でつきますよ」
え。沙夜が教えられた大通りからの道とは、随分違うわかりやすい近道で、首を傾げる。
青年は、いたずらっぽく笑うと、
「ただし最後は裏門になります。頑張って塀、越えてくださいね」
現代風の制服で短いスカートの二人の女子に向かって、いとも簡単にそんな事を言って、青年はさっさと店に引っ込んでしまった。
「……」
沙夜と少女は、しばし黙って顔を見合わせていたが。
「――いこ。最後、難しかったら手伝うよ」
ひょいっと、少女の鞄を沙夜は取り上げ。
「えっ？」
「急ごう。あなた、足早くなさそうだし」
ともすれば失礼な言い方だが、だから荷物は自分が持つと。少女が全力で走り易いように沙夜なりに気を遣っての事だった。
少女は咄嗟に事態が理解出来ず、ポカンとしていたが。慌てて首を縦に振って、青年に言われた通りの道を急いで走り始めた。
そしてきっかり十分後。そう高くない塀に囲まれた、一般的な公立学校の裏門に二人は到達していた。
「よし、誰もいない！　ほら、早く！」
「え、あ――ハイ」
沙夜に軽く背中を支えてもらいつつ、少女が先に何とか塀を越える。丁度予鈴が鳴り始め、少女が焦り顔で沙夜の方に振り向いた。
「私は大丈夫だから、早く！」
「ご、ごめんなさいっ……！」
やっと塀の内に降り立った少女の姿を沙夜は見届けると。
実に、少女の三分の一にも満たない時間で、あっさり塀を登って中に入った沙夜だった。
その早業に少女は予鈴も忘れ、またしてもポカンとしているようだった。
何しろ、二人分の鞄を持った上での早業で、沙夜の運動能力の高さは傍目に明らかだった。
「あ、あのっ」
「――？」
「ごめんなさいっ、ありがとうございます！」
「へ？？」
少女の目は、何故かじんわり潤んだ感じだ。
沙夜は首を傾げたまま、一年の教室の方へ駆けていく少女を見送っていた。

「……」

三年の教室は二階にあり、一年よりは近い。焦らずに階段を上がりながら、沙夜は少女のゆらゆら揺れていたポニーテール……自分とよく似た髪の色を思い出していた。

「――ほんと。まさに、馬の尻尾の色ね」

薄めの茶色で、昨今では珍しくない色だが、あの薄さだと、色を抜いただろうと言われた事があるはずだ。沙夜にもよくある事なのだ。

自分の出自も全然知らない沙夜は、本当に日本人なのかも正直怪しいとたまに思う。

自分と同じ髪の色、同じように時期外れの転校生。灰色の目は沙夜の方が鋭い感じだが。

「……名前、きいておけば良かったな」

別にその時、何かを予感していたわけではなかったものの――沙夜は、何故か出現した不思議とふんわりとした気分を。

何となく大事に、ゆっくり噛みしめていた。

＊

一度だけ事前の手続きで見学にきた時に、三年E組ということだけはきいていたので、迷わず教室に入った沙夜がまず困った事に。

――空いてる机……ない……――

大体の生徒は既に席についていて、何個か生徒がいない机はあるが、どれにも横や中に荷物があって主の存在を示している。

これまで転校した時は教室の後ろの方に、空いた机がある事が多かったが、それが全く用意されていないとなると――――

――E組っていうのすら嘘情報だったのかな――

そこからまず疑った沙夜の前に。

「――！」

「……うざっ」

つかつか近寄ってきたと思いきや、それだけ耳元で呟いて、同じクラスの陽美は立ち去り。

「――あなた、転校生？」

入れ替わり様に、日直らしく黒板消しを持つ無愛想な黒髪の女生徒が沙夜の方へ来ていた。

「あ、うん。どこ座ればいい？」

「……」

女生徒は怪訝な顔をして、教室を見回す。

沙夜の存在に驚かないのは、転校生が来るというのは既に周知の事なのだろう。

それならクラスは合っているはずだが――なのに沙夜の机が無い事を、彼女も不審に思ったらしい。

「……とりあえず、玖堂さんの所に座って。海外留学中で当分帰ってこないから」

彼女はそれ以上、沙夜に関わるのはご免だと思ったのか、それだけ言って自席に帰り。

「わかった。ありがと――――橘さん」

黒板の隅に書かれた日直者の名前を見ながら、沙夜は淡々と女生徒に礼を言った。

定番の、転校生紹介の朝のＳＨＲが終わり。何の変哲もなく、昼休みまであっという間に時間は過ぎていった。

お金も身寄りも何もない居候が。有難くも養って頂いている家の方針に、例えいくらか不満があろうと、あまり簡単に嘆くわけにはいかない。

「あー……お腹、減ったな……」

嫌がらせもあまり露骨になると、本気で何も言えないものかと、沙夜は実感しつつあった。

朝、狭間家で用意されていた沙夜用らしきお弁当袋に、某二十一円のチョコが二つだけ入っていた時は、もしやこれはウケ狙いかと。

「現物支給って、きっついなぁ……」

そこまで沙夜の事が嫌いなら、その程度でも何か用意している分、むしろ相手も律儀だと……そうして超速度で、お昼ご飯の終わってしまった沙夜は、机に突っ伏すしかない。

—でも忘れないで。貴女は沢山の愛に逢う—

唐突にそんな、優しいだけの声を思い出す。

「……」

今のこの状況で———そんな言葉を信じろと言われても。知らず、ペンダントを軽く睨む。

養母の曖昧さの少ない英語を思い出しつつ、沙夜はふてくされて、両目を強く閉じる。

—陽美さん、いったいどんな前情報を流してくれたものやら？—

転校生の沙夜に周囲は当然いくらか、興味は持っている様子なものの、ヒソヒソと遠目に話しているだけで近寄ってこようとしない。

高校三年目の初めともなれば、既に仲良しグループは出来上がり切っているだろう。

そこに後から割り込むのは元々難しいが、悪意をもった妨害人がいるとなると、余計に沙夜の対人ハードルは上がる一方だ。

—あー……。やりにくいなぁ、本当……—

いくつも色んな学校を経験してきた沙夜は。こうした、今時にしては平和な方の、大きな特色もない公立学校では、沙夜のような一見ワケアリの相手には近付きにくいだろう事も何となくは理解していた。

「……」

待ってよ……と沙夜は。

自分と同じように、時期外れの転校生で。しかし派閥は出来上がり切っていないだろう、一年の教室に向かった少女の事を思い出す。

—……ダメだよね、邪魔しちゃ—

少女を探してみようかと、思い付いて顔を上げたのも束の間。再び沙夜は諦めの境地に立って、ぽてんと机に突っ伏そうとして――

「狭間さん。先畑（さきはた）さんって子が呼んでるけど」

「――へ？」

狭間陽美と紛らわしくないよう、しっかりと自分の横に立って今日の日直の彼女が言った。沙夜はがばっと顔を上げると。

「あ、先輩～！　良かった、見つけたー！」

心底嬉しそうに顔を崩し、ドアの所から手を振って沙夜を見ている一年生の少女に、一瞬、教室全体の時間が止まっていた。

にこにこにこ。物怖じせず初めての学校の上級生の教室までやってきて、そんな表情をしていられる少女に。

沙夜は完全に毒気を抜かれるように、少しひきつりながらも、つられて微笑んでいた。

「――だって、先輩も転校生だったから……まだあんまり、知り合いとかいないかなって」

朝に二人で乗り越えた裏門まで来て、足場にした低い石垣に腰かける茶色い髪の少女達。

どうして来たの？　と、教室を離れてから真っ先に尋ねた沙夜に、少女はポカンとそう答えていた。

「それにわたし、まずは朝のお礼がしたくて。先輩のおかげで遅刻せずに済んだんですから」

「先輩はやめて。沙夜でいいから」

「沙夜……さん？」

「あなたは？　とりあえずまず、名前教えて」

あ。完全に忘れていたらしい少女は、照れたように目をそらしながら、早口に呟いた。

「先畑美夜（さきはたみや）です。ごめんなさい、本当に今頃」

「別に私はいいけど……同級生にはちゃんと名乗ってるわよね？」

当たり前ですー！　と不満げに慌てる。

先畑美夜。髪の色だけでなく、名前も少し沙夜と系統が似ている。

しかしそのくるくると、笑ったり慌てたり目まぐるしい感情表現は、沙夜とは正反対の雰囲気だった。

「ほんっとに久しぶりに寝坊しちゃったから、朝は慌ててただけなんです！」

「……」

その美夜の表情がどうにも愛らしく、沙夜は不覚にも、これまでの無愛想からまたも顔が緩んでしまった。

「えー。何で笑うんですか、沙夜さんー」

「別に……でもいいの？　せっかくの昼休み、ちゃんとクラスで友達作った方が良くない？」

「――……」

その、唐突な美夜の黙り込みと、生き生きしていたはずの笑顔にさした影に――理由はわからないが、空気を察した沙夜はマズイと思ったものの。

「あ、ゴメンなさい……！　わたし、多分、あんまり長くここにいられないから」
沙夜のその気持ちを更に察したのか、美夜はあっさりと黙り込みの理由を白状していた。
「ずっと色んな所、転々としていて。だから今までもあんまり、友達作れてないんです」
空気が重くならないように、明るく言おうとしているらしいが。代わりに沙夜が黙り込み、ますます美夜は慌て始めた。
「ごめんなさい、沙夜さん何か話しやすくて――こんな話ダメですよね、暗いですよね！」
あわあわあわと一人で慌てる美夜を、今度は沙夜がポカンと見つめる。
　何か明るい話題をと焦ったのか、美夜は、思い出したように顔つきを変えて笑った。
「それより知ってますか？　朝、道を教えてくれたお花屋のお兄さん、実はこの辺りでは評判のお花屋さんらしいんです。朝のお礼に今日の帰り、一緒によりませんか？」
「……へ――……評判、って？」
「お任せセットの花束がとても安くて、でも凄く素敵らしいんです。何というか、口ではうまく言えない素敵さらしいんですけど」
「……は？」
何その、胡散臭さ……。きらきらとした目で言う美夜には悪いが、歳の割にリアリストな沙夜は、つい真っ先にそう思った。
　しかし、お任せセットがどれだけ安くて、有り得ないくらいに素敵だったとしても。
「ごめん、美夜ちゃん。私全然お金ないから、一緒に行けない」
「えっ？」
「お礼したいのは山々だけど……正直今日のお昼ご飯にも事欠く状態なんだ」
ええーっ！　と美夜は、某二十一円チョコの紙くずを取り出した沙夜に、しばし絶句し。
「――ちょっと待ってて下さい！」
何やら突然、足早に駆けていってしまった。
「？？」
お昼休みも、後残りわずか。なのにいったい何処に行ってしまったのだろうと、ぽけっと沙夜は美夜の帰りを待っていたが。
　やがて数分もしない内に、美夜が、朝より早いかもしれない程の足取りで息を切らして駆け戻ってきた。
「沙夜さん！　朝のお礼です、これ！」
「――へ？」
ずいっと、どう見ても学食のものと疑わしき菓子パンを美夜は差し出す。
「今日、沢山お弁当持って来過ぎちゃって！食べ切れなかったのでもらって下さい！」
――あー……それはー……――
　今まで沙夜は、こうした貰い物は、決して受け取らないと決めていたところがあった。
　それは多分、何処かに施しのような要素があったり、同情や憐れみは重いからだろう。沙夜は昔からずっと、あまり自分の境遇を、重く考えないようにしてきたのだ。

しかし、きっと本気で大真面目に走った、肩で息をしている美夜を見ると。

「……ありがと。別に、お礼されるような事、何もしてないけど」

何故か美夜は本気で、これはお礼のチャンス！と頑張ったらしい事が全身から伝わってきて、沙夜はとてもいらないとは言えなかった。

「それとあの、お花屋さん……わたし、凄く行きたいので、ついてきてくれませんか？」お花はわたしが買いたいんです、と。それも本当に、心細そうな美夜の本心だった。

「それじゃ……放課後、またここで」

淡々と言ったが、美夜は心から、やった！　という顔でまたニコニコーと喜んでいるので。

沙夜も何故か、自然に顔が綻ぶのだった。

らしくないなと少しだけ首を傾げつつも。

＊

「ちょっと沙夜。はい、これ」

「――？」

クラス全体から遠巻きにされている事以外は、至って平穏に終わった転校初日の放課後。

唐突に、陽美から沙夜は、箒とチリトリを当然のように手渡されていた。

「あんたは居候なんだから、なんかアタシに恩を返すのが当たり前でしょ」

周囲に聞こえないよう、小声で耳元で囁くと。反論出来ない沙夜を横目に、振り返ることもなく陽美は帰ってしまった。

「……」

どうやら、陽美と同じ掃除当番の他の生徒も、今日はいいと彼女に言われて帰ったらしい。

―陽美さん達の担当って、隣の空き教室？―

あの机と椅子を全て一人で移動させ、丸々一つの教室を自分一人で掃除するのかと……

沙夜は大きな溜め息をついて、恨めしげに、箒とチリトリを眺めていた。

しかして数十分後。

「――ごめんね、美夜ちゃん。待たせた上に手伝わせちゃって」

「そんなことないです！　これでやーっと、今朝のお礼の二つ目が出来ました！」

他の生徒が帰っているのに、なかなかやって来ない沙夜の様子を見に来た美夜は。一人で空き教室を掃除している沙夜の姿に、憤然と雑巾を持って押し入ってきたのだった。

「二つ目がって……私そんなに何かした？」

「沙夜さんは優しい人です！　なのにこんな、それを利用した意地悪は許せないです！」

先程から美夜はずっと、沙夜に対してでなく、厳しい顔をしながら怒り任せに、ごしごしと床を拭き殴っていた。

―本当にころころ表情が変わる子だなぁ―

無愛想な沙夜には感心してしまうくらいだ。

そして意外にも、美夜は、手つきがわりとてきぱきとしている。美夜が参戦してからの掃除の進行具合は、沙夜の基準からすれば、―手抜き……とも言えなくもないけど―

重要ポイントを考えている、働き慣れした人の素早い動き方だと沙夜は感じていた。

「大雑把なことは得意なんです、わたし」

少しずつ憤慨を治めて、ささっと机の位置を素早く戻して笑っている美夜に、

「そうよね。ここに必死に手をかける必要、別にないよね」

真面目に一人できっちり掃除をやり遂げようとしていた沙夜は、苦笑するしかなかった。

「美夜ちゃん……バイトか何かしてる？」

そして、空き教室を後にした二人は。

近道のために裏門に向かう途中で、淡々と尋ねた沙夜に美夜はぎくっと体を固めた。

「えーっと……」

沙夜の方を見ずに、固まったまま俯いて、

「……わかっちゃいます？」

「――ううん。ただ、何となく？」

どうやら全く図星だったらしい姿に、沙夜は悪いことをきいたなと少し声をひそめる。

―確かここ、アルバイト禁止だったよね―

だから沙夜も学校を出てからきけば良かったと思ったのだ。

「と言っても、もう夕方だし。誰もいないか」

帰宅部の下校生徒のピークは過ぎ、部活動をする生徒は運動場か体育館に集まっている。

「それにしても美夜ちゃんって、正直よね」

沙夜はただ純粋に、感心してそう口にした。

美夜はそれを、意図が全くわからず、え？　と困ったような顔をして沙夜を見る。

「それ……いいことですか？」

「――と思うけど？　わかりやすいし」

「ええー……」

しかし本人としては良いと思えないらしく、ひたすらわかりやすく困惑を浮かべていた。

「正直ついでにきいちゃうけど、美夜ちゃん、何でバイトしてるの？」

どちらかというと美夜は、あまり自ら規則を破る方に見えない。小遣い稼ぎという単純な理由ではないのではないかと、沙夜は何故かかなり気になり始めていた。

「えーっと、うち、お母さんが病気なので、わたししか働けないんですよ～」

何でもない事のようにあっさり答えるので、沙夜もうっかり聞き逃しそうになったが。

その一。先畑さんちは多分母子家庭らしい。

その二。先畑さんちの家計は何と美夜頼み。

かなり重要な情報を危うく拾い上げて、

「それって凄くない……！？」

驚愕！　と美夜の方を見た沙夜に、美夜は、

「え？　そうですか？」

雑巾がけのせいではない、皺だらけの手に。

何枚も貼った絆創膏を軽くさすっていた。

「でも医療費は保険から出てますし、家賃は知り合いの所を転々としてて安いみたいだし」大した事ないですよと笑うが、つまりは他の家計費は美夜が担っているという事だろう。

「……今日、大丈夫なの？　遊んでて」

しかも花買ったりなんかして……と、本気で沙夜は心配顔になっていたが、

「転校初日なので夜しか仕事入れてません！」だから大丈夫！　と胸を張る美夜に。

とりあえず感心し過ぎて絶句しか出来ない沙夜だった。

――……そりゃ、なかなか友達も作れないわ――

昼休みの美夜の暗い影を思い出した沙夜も、心なしか憂い顔をしかかったその時……丁度、朝の花屋のすぐ近くまで辿り着いていた。

そこで彼女達二人は運命と出会う事を。

今のこの時はまだ、知るはずもなく。

――あれれ、と。最初に首を傾げたのは、小さな財布を取り出そうとした美夜だった。

「先客でしょうか？」

鞄をあさって立ち止っていた時、花屋の方に大通りから、二つの人影が足早に入っていき。その後から賑やかな笑い声や、慌てるような今朝の青年の声が聞こえてきていた。

「何か、身内みたいな感じね」

夕暮れ時で閉店より少し前の、客足の少ない時間を見計らってきたのだろうか。

アハハハともれてきた大きな声に、沙夜と美夜は、期せずして顔を見合わせていた。

「……」

何となく、今お邪魔していいものだろうかと。そんな躊躇いを少し感じさせる程に、店内は和やかでリラックスした雰囲気になりつつあった。

――と、そこへ。

「あ、やっぱり！　お客さんだー！」

ひょこっと。店の中から、沙夜達に向かって顔を出した人影があった。

「ほら、俺の言った通りだったろ！　今日は絶対ぎりぎりまで開けてる方がいいって！」

「何騒いでる。いちいち変な事、大っぴらに口にするんじゃない、蛍」

新たな誰かが人影をゴツンとこづき、いてぇ！と不満そうな、子供っぽさの残る声が上がる。

そしてようやく、花屋の主が人影の間から外に出てきて――沙夜と美夜の姿に気付いた。

「ごめんなさい。驚かせちゃいましたね」

青年は、二人の姿を見ても全く驚く事はなく、

「朝は大丈夫でしたか？」

本当に社交辞令のようにそう尋ねて。二人の返事を待つ事もなく、良かったらどうぞと、当然のように二人を招き入れたのだった。

――初めて、彼のその無愛想な顔を見た時。
自分の中に生まれた心を、何と名付ければ良かったのか。ずっと後々も、何度考えても、結局沙夜にはわかることはなかった。

「……あんたら……」
店内にいた、今朝の花屋の青年と、野球帽を被った短い茶髪の子供っぽい青年と――
黒く尖った、それでも丸みのある鳥頭で、高い背に黒い革のジャケットを羽織る青年は。
「あんたら――普通じゃ、ないな」
おそるおそる店に入ってきた沙夜と美夜を、無遠慮にその黒い目で見貫いた。
え？　と驚いた二人が振り返ると、青年の目には心なしか、蒼暗い光が宿っていて――
「……どういう意味？」
圧倒されてしまった美夜をかばうような形で、ずいっと沙夜は黒い青年の真正面に立つと、真っ直ぐに青年の目を見返してそう口にした。

「……」
青年はその沙夜の眼光に、逆に不可解そうにそのまま表情を固めてしまう。
―何コイツ……何で何も言わないのよ？――
相手から言ってきたのにと、沙夜が自分でも珍しい程、苛立ちを感じそうになったその時。
「なーに変なこと言ってんだよ、薫兄！」
ばんばんばん！　と。爽やか過ぎる笑い顔で青年の背中を激しく叩き、野球帽を被る方の青年が、沙夜の前にぱっと滑り込んだ。
「ごめんなーお嬢さん、気にしない忘れて！　薫兄は時々ナンパの仕方を間違えるんだよ！」
オイ、と強く不服そうな青年をものともせず、
「俺、葉月蛍！　お嬢さんここらじゃ見ない顔だけど、新入生？　それとも転校生？」
葉月蛍と名乗った野球帽の彼は、にっぱりと、人の良さそうな裏表のない顔で笑っていた。

何故彼から話しかけられたか、状況が全く飲み込めない沙夜は呆気にとられて、
「ここ、俺の弟分の番夜織って奴がやってる花屋なんだけどさ、手前みそで悪いけど結構いけてるぜ！　良かったら買ってってな！」
ひたすらぐいぐい押してくる彼に、え……と、黒い青年のことはすっかり忘れ、危うく頷きかねない状態にまでなってしまった。
さすがに見かねる状態だったのか、
「ちょっと、蛍さん――勝手にヒトの本名をばらさないのと、お客さん達を脅かさないで下さい」
「――あ、あのっ！」
沙夜の後ろで縮こまっていた美夜が、やっと生色を取り戻し、取り成しに出てきた花屋の青年の方へ震え混じりの声をあげた。
「朝は本当、有難うございました！　ここのお花、お任せセットが凄くキレイってきいて、良かったら一つお願いします！」
「……――」

花屋の青年は、あれ……という感じで。
必死に要点だけは何とか伝えた美夜を見て、虚をつかれたような顔で。しばらく何故か、時間が止まったようにそのままの顔つきで、自分を必死に見る美夜を見つめ返していた。

「だってー、夜織！　お任せセット、一つ！」
野球帽の彼は、今度はそんな花屋の背中を、遠慮なくばんばんと叩く。
うわっ、という顔で背中の痛みを堪えつつ、
「――わかりました。ちょっとお待ち下さい」
再び今朝のような柔らかい笑顔を浮かべると、切花を並べたエリアに向かい、ひょいひょい無造作に花を選び始めた青年だった。
「……」
そんな背中を、必死に同じ顔で見つめ続ける美夜は気付かないだろうが。沙夜から見ると、
―何か……何てフリーダムなチョイス……―
色合いや花の大きさ、形など、統一感のない小さな花束が出来上がっていく。

……が。それを青年から受け取った美夜は。
「うわあ……！　凄い、これ本当凄いです！」
沙夜には全然理解出来ない程に、心の底からその花束に感動していた。……それは決して、お世辞や社交辞令のレベルではなかった。
「――良かった。気に入ってもらえて」
花屋の青年はふわりと、その美夜の様子に、今までのような笑顔ではない僅かな微笑みを目端に宿して……しかしそれも束の間、
「お連れの方にも用意しますね」
え。沙夜が断る暇もなく、再び切花エリアに引っ込んでいってしまった。
――そして。再びやってきた青年が沙夜に渡してくれた花束は。
「……ウソ」
――それは決して、フラワーアレンジメントとしてみれば全く上質ではなく。

値段相応の切花が特に芸もなく、無造作に束ねられただけの花束なのに……驚くことに沙夜までもが、美夜の感動がある程度は理解出来てしまった。
「どうして……私の好みの花ばっかり……」
えっ。と美夜が、ばっと沙夜の方を向いて、
「わたしもです！　このお花、名前とか全然知らないけど、どれも好きな感じなんです！」
驚いて顔を見合わせる二人に、花屋の青年は柔らかくニコニコしながら、
「それは良かったです。貴女達のイメージで選ばせてもらったので」
「くぅー、ニクイ事言うねぇ、このイロ男！」
む。と、野球帽の彼からの茶々に不満そうにしながらも、
「他のお客さんの悪ふざけで二人にはご迷惑、おかけしたので。お代はいりませんよ」
笑ってそう言うと、ほらほらと青年達を追い立てながら、旧式なレジスターの電源をチン、と落としてしまった。

「えっ……！　でもそんな……！」
慌てて美夜が、ずっと手に持っていた小さなお財布を開けようとしたものの、
「気にしない気にしない！　それでも悪いと思ったらまた来てくれよな！」
「貴方が言える立場ですか、それ……」
野球帽の彼に強引に手を握られ、財布の口を閉められてしまった。一連の流れを見ながら半ば呆れる沙夜に、
「……イメージと言うなら……根無し草だろ、どっちかというと」
ぼそっと。ずっと黙って潜んでいた青年が、再び呟いた一言を、聞き逃がす事は出来ない注意力常備の沙夜だった。
「……アナタねぇ？　さっきから、いったいどういう――」
根無し草。天涯孤独の沙夜には確かに一番、ふさわしいかもしれない植物だが。
―何かコイツ、信じられないくらい的確な、ムカつく一言多いんだけど！？―
「すみません、もう閉店時間なので」
しかしまたしても、沙夜と青年の間に他人が割って入って。花屋の青年がやんわりと扉を指して促してくれたので、沙夜は何とか心を治めてそこから離れることが出来た。
「……何なの……あの人」
「――？　沙夜さん？」
シャッターの下ろされた花屋を後にしながら、お任せセットの花束を持って嬉しげな美夜は、沙夜と黒い青年のやりとりは気付いておらず。ただ不思議そうに、黙って歩く沙夜について、朝と同じ道を逆向きに辿っていくのだった。

そして。そんな二人の後ろ姿を、ガラス戸から見守っていた青年が――残った青年達と、少女達のことについて話していた内容など、当然知るべくもない。
「――ちょっと。薫兄……何、さっきの」
「……」
野球帽の青年が物凄く不満そうに、少女らが店に入る前にこづかれた頭をさわさわ撫でる。
「俺には余計な事言うなって言って、自分は何なんだよ。何か一番、きわどくなかった？」
彼は痛く不満そうだが、何分全身の雰囲気が幼いため、詰問口調にはどうしてもならない。だからか却ってバツが悪そうに、黒い青年はやれやれと片手で自分の頭を抱えていた。
「正直……おれにも、よくわからない」
どうして自分がわざわざ、殊更少女の神経を逆撫でするような言葉を口にしたのか。
しかしその不可解感は、彼だけではなく、
「そうですね。僕も少し、やりすぎました」
あー、やっぱり、と。野球帽を被り直した、一見は一番幼く見える青年は冷静に頷く。
「彼女達……普通過ぎて、おかしいですね」
夕暮れに消えていった少女達を見つめながら――彼らは、同時に静かに頷いていた。

＊

……ああ。今日は何て、長い一日なんだか。

部屋の主の陽美がお風呂に入っているので、一人でゴロンとロフトベッドの上段に転がり、やっと一息がつけた沙夜だった。

狭間家に帰り着いた途端、陽美は「遅い！」と偉い剣幕だった。

確かに夕方花屋を出た後、道をよく覚えていなかった美夜に付き添う内、結局は彼女の家までいく形になってしまい。思ったよりも帰宅時間が遅くなったことはあるのだが。

「うちの門限は六時だし！　ていうかあんた、ちょっとこっち来なさいよ！」

—そんなの初耳なんですけど！？—

しかし。台所で待っていた狭間さんの困り顔に、沙夜は弁明は出来なくなってしまった。

台所ではゴミ箱の蓋が開けられて、中には沙夜に用意されていた分と思われるお弁当が容器ごと打ち捨てられており。

「朝、せっかくお母さんが作ってくれたのに。これどういうこと？」

—どういうことなんて……私がききたい—

どう考えても、沙夜のお弁当を勝手に捨てて二十一円チョコなどとすりかえたのは、目の前の彼女だとしか思えないのだが。

「……」

いつもは穏やかな笑顔の狭間さん——黒髪で七三分けの四十台男性が、硬い顔つきで腕を組んで黙り込んでしまっているのは。

—陽美さんが悪いなんて……言えない—

迷惑をかけたくないなら、それが一番だろう。

それでも沙夜は。

やってもいない事を白々、ごめんなさいと言ってしまえる程に不誠実ではなく。

「……」

狭間さん以上に硬い顔色で黙り込んだ沙夜に、狭間さんはやがて、大きな溜め息をついた。

「……沙夜君。とても残念なのだが……」

ゆっくり低い声で話し始める父親に、陽美はこころなしか期待するような目つきをしたが、

「こういう事は、なるべく我慢して振舞ってもらうように、大人としてお願いするよ」

狭間さんからの叱責らしき言葉は、たったそれだけで。

「……——」

拍子抜けした沙夜が顔を上げると、そこには、全く納得がいかないようだが口には出さない陽実と、難しい顔で考え込んでいる狭間さんという、よくわからない光景が広がっていた。

その後は結局、それ以上何かお咎めがあるわけではなく。多忙らしい狭間さんが珍しく一緒の夕飯が終わり、さっさと部屋に帰してもらった沙夜だった。

「さっきのって結局……どーいう意味？」
ベッド上で一人ごちる沙夜の「さっき」は、狭間さんのよくわからない苦言だけではなく。
―あんたら――普通じゃ、ないな―
むかむかむかグサ……。
夕方の出来事を思い出すと、何故か先程のお弁当事件以上の怒りが沙夜を襲った。
「ていうか……」
アイツ、陽美さんよりムカつくのは何で？
美夜と別れるまでは何とか抑えていたが、ここまで自分が腹を立てていたとは、ここでやっと一息つけるまでは沙夜は気付いてすらいなかった。
あからさまな嫌がらせをする狭間陽美に、沙夜が抱く思いは色々複雑だ。
腹も立つし、現実問題生活上も困るので、出来ればもう少しうまくやっていきたい。
―でも……陽美さんの気持ちも、わかる気もするし……―
他人である沙夜には、狭間さんは穏やかな良い人だが。もしも彼が自分の父親で、突然見も知らぬ相手と同居を強要し、何かあった時もあの歯切れの悪さでは苛々するだろう。闖入者に八つ当たりだってしたくなる。
それでもこう何回も嫌がらせをされると、怒りというより、気疲れが強まる一方だった。
―根無し草だろ、どっちかというと―
ぐさぐさぐさムカ。
青年のその言いぶりは、それ自体は正しい。
「そりゃ、誰とも……今も連絡取るような人、いないけど」
胸元に揺れる青い石だけが、辛うじて一つ、確かに与えられた愛を示しはするものの……贈り主は死んでしまったし、何より、沙夜は。最後まで彼女に打ち解ける事は出来なかった。
「だって……」
――その、青い目で若い、義理のお母さんは、
「普通じゃ……なかったんだもの……」
そう言って周囲の人――夫にすら怖がられて。遠巻きにされていた儚い面影が瞼に浮かんだ。
―サヤ、と。
いつもその日本的な名前を発音しにくそうに、それでも常に、穏やかに微笑みながら。
多分初めて、沙夜を我が子のように思って可愛がってくれた、異国の女性の青い目が、ペンダントの向こうに見えた気がした。
これまでひたすらたらい回しにされてきた沙夜は、一時はアメリカで暮らしていた事もあった。だから実は英語もペラペラに話せる。
その時の養母が、沙夜がずっとつけている天然石の青いペンダントをくれた人なのだが。

若くして病気で亡くなったその養母は、元々あちらの世界に近いような感じの人で――様々な予言めいた言動をしては、よく周囲の人達を驚かせていた。

「普通じゃないっていうような人は……多分、ああいう人のことだよね」

沙夜もあまり、養母の言う事は理解出来ず、それでも養母が「悪い事が起きる」というと必ず何か嫌な事があったので。

―別に、お義母さんのせいじゃないけど――……いつしか自然と、その養母とはあまり、話をしたくないと思ってしまった。

その彼女との生活は、彼女が亡くなるまで二年間続いた。多分一つの家での最長記録だ。

養父の方とは当たり障りなくうまくやっていたと思うが、養母が亡くなった後はすぐに、新たに養子に出されてしまい、今も音沙汰は全くもってない。

―私はずっと、可愛い娘がほしかったの――だから――沙夜を求めたのは完全に彼女で。

そんな彼女が、最後に沙夜に遺した言葉は。

痩せこけた青白い顔で、死の間際に彼女は、それでもかなり迷った後で。沙夜の手を握り、形見のペンダントを持たせながら、はっきりソレを口にした。

―貴女は最初に愛した人とは生きられない――何故なら。彼女は哀しそうな目をして囁く。

―貴女はその人と、出会う事すら出来ない――そんな不吉な予言を伝えられて……沙夜は、死にゆく彼女に歎いたらいいのか、それとも怖がるところなのか、自分の心を見失って。

ただ、不思議と涙だけは。

ひたすらとめどなく流れ落ちて、手を握る養母の両手をぽたぽたと濡らし続けていた。

最初に愛した人と、私は生きられない――

正直、今でもその意味はよくわからない。

―でも忘れないで。貴女は沢山の愛に逢う――曖昧さのない英語には多分、覚え違いはない。優しく頬を撫でてくれた記憶も、儚い愛も。

―だから決して諦めないで……大切にして――きっとその声があまりに優しかったから……最後まで養母に心は開けなかったとはいえ。今だって沙夜は、信じているのだ。

例えその予言を、理解していなかろうと。

今度こそ。私は絶対、幸せになれると。

「だってあれだけ、悪い事は当たったんだし」それなら良い事だって当たってもいいだろう。その石を見つめているとそんな風に思えた。

寝ている間に絡まないよう、そっと、青いペンダントを外すと。いつまでもお風呂から上がらない陽美を待つのを諦めた沙夜だった。

—もうさっさと寝て、明日は朝一番でお風呂借りよう……—

養母の事を久々に思い出したせいなのか、いつの間にか治まっていた怒りも忘れて、

「明日の朝……美夜ちゃん、会えるかな……」

一緒に登校しようと、一応待ち合わせをした少女の朗らかな笑顔を思い出して、少しだけ安らいだ気持ちで。まだ少々早い時間だが、沙夜は眠りに落ちていけたのだった。

＊

今度こそ本当に。というよりついに。

陽美は洒落にならない事をしてくれたと、沙夜は怒りか歎きかわからない——ただ強い動揺と叫びたいような思いに揺さぶられて、高校のゴミ収集場で手当たり次第にゴミ袋をひっくり返していた。

—助けて、美夜ちゃん—

どうしてここまで自分が混乱しているかも、正直よくわからない。それでも、今の自分を落ち着かせる事が出来そうな存在としては、唯一その名前だけが度々浮かんだ。

あれから、可能な範囲で登下校を一緒にと約束した美夜は。翌日から早々、二日連続で学校を休んでいた。

普通の現代の若者達なら、携帯やネットで理由がきけて、元気かも簡単に確かめられる。けれど沙夜は何一つそういうツールを持っていないし、露骨に無視されている狭間家では電話一つ、気軽に借りることも出来ない。

—そもそも、連絡先もまだ知らないし—

仕方ないので、今日は放課後に直接家まで行ってみようと思っていたのだが——

「え——ない？」

着替えを置いた机の上で、制服の間に挟んでおいたはずのペンダントに起きていた異変。

異様な事には、天然石のペンダントトップだけが、鎖紐を残して忽然と姿を消していた。

鎖紐への装着部の金具を見ると、不自然な歪みがあり、どう見ても引き千切られた痕で。

「何変な顔してんのよ。落し物でもしたの？」

にやにやと、意地悪な顔をして楽しげに言う陽美に、誰が犯人かは明らかな状態だった。

今日は転校してから初めての体育の授業で、英語と体育を得意とする沙夜は、久しぶりに張り切って授業に参加出来た。同級生達も、沙夜の鮮やかな身のこなしを見て感嘆の声をあげ、やっと一人二人話しかけてくれる人が現れたのだが。

陽美は見学していたが、度々姿の見えない時間があり、多分その間に仕掛けた事だろう。

「ペンダントがなくなったんです……！」

わけがわからない程焦りながら言った沙夜に、

「寿命で壊れて、勝手に千切れたんでしょ」

それだけ言うと、実に満足そうな顔をして、自分の席へと戻ってしまった。

「……――」

何故か沙夜は、いてもたってもいられず。

六時限目の授業がまだある事にも関わらず、教室から飛び出し、まっすぐゴミ収集場へと向かったのだった。

「ない……ない、どこにもない……！」

もうこれで、一体いくつめのゴミ袋の中身をぶちまけただろう。汚れの目立ち難い濃灰のブレザーの制服まですっかり黒ずみ、その上そもそもここに、探す物があるとは限らない不安が、ますます沙夜の頭を混乱させていく。

「ない……見つからないよ、お義母さん――」

何故なのだろうか。彼女を失った時のような、わけのわからない涙が両目に溢れていく。

沙夜は彼女に、心を開いていなかったのに。

―だから決して諦めないで……大切にして―

それでも彼女の優しい声が頭の奥に響いて。周囲をゴミに囲まれながら、沙夜は、途方に暮れて座り込んでしまった。

こんな、泣いてる場合なんかじゃないのに。

早く次を探さなきゃと、必死に手は新しいゴミ袋に伸びはしたものの……これまでの、ぶちまけては詰め直したゴミ袋の中身ですら、決して隅々まで探せたわけではない事を。

「こんなの……探せっこ、ない……」

透明度の低い薄い青で、球形の小さな天然石。養母の青い目を自然と思い出させるその石は、一度失えば、取り戻すにはあまりに儚過ぎた。

そんな――一人ぼっちの少女の姿を。

彼はつい、見るに見かねてしまったのか。

「……オイ。何やってるんだ、あんた」

ぼそっと、背後の方からかけられた気怠げな低い声に。沙夜は涙目のままで、ゆっくりと後ろを振り返った。

「って……え？」

そこにいたのは、暗い紺のブルゾンのような上下の制服を着て、同じ色の帽子を被る――どう見ても生粋の郵便配達人。

「仕事中だよ。あんたも本当は授業あるだろ」

その郵便配達人は、ゴミ収集所の近くにあるポストの集配物が入っている鞄を見せながら、深めに被っていた帽子をとった。

「って、アナタこの間の！」

沙夜は涙目のままながら思わず立ち上がり、帽子の下から現れた黒髪の、丸みある鳥頭を持つ青年――先日に花屋で喧嘩を売ってきた彼に。警戒心満天の涙目を向ける。

「……アナタとか言われるとくすぐったいな。おれは鷹野薫（たかのかおる）だ。あんたは？」

「えっ……さ、沙夜。――狭間、沙夜」

そうか。と落ち着いた無表情でマイペースに頷く彼、鷹野薫に沙夜は何だか気勢をそがれ、

「……何の用？」

涙を拭いながらそうきくだけで精一杯だった。

「……」
薫は無表情に、沙夜の汚れた制服を一瞥し、
「……失くし物でもしたのか、あんた」
この状況を見れば誰でもわかるだろう事を、何故か重々しく、静かに口にしていた。
「……」
またしても溢れてきた涙を抑えんと、黙って一度だけ頷いた沙夜に、
「失くし物の一部か写真――持ってるか？」
「……え？」
薫は淡々と、沙夜の目をまっすぐに見て言い。
沙夜はわけがわからないまま、そう言えばと、千切られて残っていた方の鎖紐を取り出した。
「――上々」
薫はその鎖紐を沙夜から受け取ると、静かに柔らかく握り締め、目を閉じた。
「――――――」
ピシリ……と。息の詰まるのような緊張した空気が一瞬、目を閉じた薫の全身を包み込む。
けれどそれは本当に一瞬で、その後一分もたたない内に薫は目をあけると。
「――ゴミはゴミだけど。どうやらまだ、ゴミ箱の中にあるっぽいぜ」
そう口にすると、くるっと振り返って足早に歩き始めた。
「えっ――」
鎖紐を持ったまま、さも当たり前かのように構内へ向かっていく。この高校のＯＢなのか勝手知ったる我が家。という感じで、迷わず体育館の方に足を進める彼を、戸惑いながら沙夜は小走りでついていった。
うそ……と。体育館裏の倉庫のゴミ箱から、青くて白い小さな天然石が出てきた時には。
沙夜は思わず立ちすくんで、ほらよと石を手渡す薫に、お礼も言えずに黙り込んでいた。
「大事にしとけよ。それ、あんたを守りたい想いが込められてるぜ」
「なん……で――」
――何でわかるの？
やっと何とか、それだけ口にした沙夜に。青年は少しだけ迷った様子ながら、やがては諦めたように息をつくと、
「何でも何も。わかるものは仕方ないだろう」
そして、あんただって。と意地悪そうな顔で、
「何で自分が天涯孤独かなんて、きかれてもどう答えようもないだろう？」
「――」
きょとんと。にやりとした青年のその言葉に、思わず沙夜は、目をまん丸くして。
そして、ムカー……と。純粋なむかつきがお腹の底から湧き上がってきたが、それでも手の中にある青い石のヒヤリとした感触で、何とか冷静に心を静めた。
「それ……何の関係があるの？」
純度の高い怒り感情の効果か、いつの間にか先程までの混乱も忘れ、元の調子に戻りつつある沙夜に青年は不敵に笑う。
「どっちも天命って事だ。どうしようもない」

だから、何でなんてきいても仕方ないだろう。
ペンダントの在り処だけではなく、沙夜の身の上まで当ててしまった薫は、そんな風に何処か――儚くも見える顔で笑った。

「……おかしな人」
沙夜はペンダントを、当座の保管場所として小銭入れにしまいながら、溜め息をついた。
「そうか？　おれは至って真っ当な、一介の郵便配達人だけどな？」
不機嫌そうな沙夜に何故か青年は、楽しげにそんな軽口を始める。
「何よ。私だってごく普通の女子高校生だし」
「……本当、そうだな。普通過ぎるのが変というか、逆に普通である事が異常というか」
「――どういう意味？」
もう何度、この青年に尋ねたかもわからない問いを、改まって沙夜ははっきりと口にした。
薫はそんな、不機嫌ながらも冷静な物腰の少女に、更なる燃料を注がんとして、
「あんた、親に捨てられたんだろ？」
けろりと簡単に、そんな事を口にする性格の悪い青年を、沙夜は平然と睨み返す。
「なら、少しは歪む方が普通じゃないか？」
「だったら何なの？」
本当に冷静に、沙夜は普段のままの顔でいた。
今までだって何度も、同じ類の無頼漢の声に、沙夜はそう返してきたのだ。
「親には親の事情とかあったんだろうけど。それって私の責任じゃないわけだし」
「ふーん……なるほど？」
「親がどうあれ私自身の事は――私がどんな人間になるかは私の自由だもの」
それが、様々な暮らしを経験する内に沙夜が掴んだ、沙夜なりの生きる筋道だった。
今この環境に生み落とされて。どんな風に生まれるかまでは、誰も選べないのだから。
「私は悪くないし、間違った事もしてない」
だから。真っ当に生きる限り、沙夜にだって、
「普通に幸せになる権利、あるはずだもの」
どうしても上手く説明出来ないので、いつもそう言うしかない沙夜ではあったものの。
「――親のことは、普通じゃない言い訳にはならないってことか」
薫はそんな沙夜を。眩しくも痛ましくもあるような、蒼い目で見つめていた。
「……」
元々、自分は口下手な方だとは思うが。
―何かかなり、違って伝わってるような？―
しかし元々、勤務中だった薫がくるっと踵を返してしまったので、それ以上無理に話そうとは思わなかった。
「――」
じゃあな、と遠ざかっていく郵便配達人に。
有難うと言い忘れた事だけが気になっていた。

＊

六時限目の授業どころか、ＨＲもとっくに始まってしまった時間だったので。
体育館裏から裏門に出て、こっそり学校を後にした沙夜は一路、美夜の家へと向かった。

途中にどうしても、店の前を通る事になる例の花屋。ここ数日の登下校時、何故か必ずタイミング良くあの花屋の青年に出くわし、早くも二人は、「沙夜さん」、「夜織さん」と名前で呼び合う間柄になっていた。
―別にそこまで、仲いいわけじゃないけど―
何度も名字の変わった沙夜は、基本は名前で呼んでもらうように習慣化していたのだ。

「へえ……。全然見ないとは思ってましたが、学校休まれてたんですね、もうお一方は」
番夜織は、元々沙夜達の通う高校のＯＢで、現在十九歳らしい。卒業してすぐこの花屋を営み、大学には行っていないとの事だった。
「良かったらこれ、どうぞ」
お見舞いですと夜織が差し出した花束を見て。
「……ありがと。美夜ちゃんに届けるわ」
本当はタダで受け取りたくないのだが、先日転校初日、美夜について彼女の家に行った時、
「病気の母」がお任せセットの花束に大喜びしていたので。狭間家に持ち帰るのも微妙な沙夜の花束も飾ってもらった事を考えると、ま、いっかと、憮然と受け取った沙夜だった。
「多分美夜ちゃんは、元気だと思うんだけど」
「わかるんですか？」
「何となくだけど……お母さんの方に、何かあったんじゃないかな」
どうしてか、沙夜の中にはその確信があった。夜織が不思議そうにしているが、説明出来る理由もないので沙夜は誤魔化す事にする。

「あのさ、前にここにいた――鷹野薫さん？」
話題を変えるためとはいえ、こちらも大切な用件だった。沙夜の口からその名が出た事に、更に不思議そうな顔をして夜織は沙夜を見る。
「今日、ちょっと助けてもらった事があって。でもお礼言い忘れちゃって、もしまたここに来たら伝えてもらえない？」
「薫さんが人助け？　珍しい事もありますね」
夜織は沙夜より二つも年上なのに、不思議と話しやすかった。逆に夜織の方が丁寧語で、どちらが年上かわからない状態だ。
「ふーん……珍しいの？」
「ええ。彼はあの力は隠して生きてますから」
――……と。しれっとそう口にした夜織に、沙夜は思わず、花束を握り潰しそうになった。
「待って――夜織さん。薫さんがどうやって私を助けてくれたか、わかるの？」
「……」
……あ、しまった。自分で自分を不思議がるように、夜織は目を丸くしている。
「沙夜さんには何か、嘘がつけないばかりか、隠し事も難しいみたいですね……」
だからなのかな、と。一人で勝手に納得したように、夜織はうんうん頷いている。

そして改めて、夜織は苦笑いをしながら、
「別に、沙夜さんと薫さんに、どういう事があったのかはわかりません。ただですね……沙夜さんが、アイツ何者！？　と強く思っているのはとても伝わってくるんです」
「って――えっ？」
「そして、そうですね。沙夜さんが感じてる通り僕達は……異常者です。……でも――」
内緒にしてくださいね、と。にこにこ笑って簡単にそんな事を言う夜織に、沙夜は、
「はい――？」
確実に一歩、後ずさりながら、そう返すしか出来なかった。何故なら……図星だったから。
……でも。きっとこれは、夜織さん流の、タチの良くない冗談だと思おう。
夜織はそれ以上は何も言わず、にこにこと黙って、美夜の家に向かう沙夜に手を振り。
そんな彼の挙動を、家に辿り着いてから、美夜に話してみたところ……。
「――それはもしかすると、あれですね！？　最近流行りの超常現象とか怪異みたいな！」
「いや……別に、流行ってないと思うけど」
何とか、夜からバイトに出る所だったという美夜が在宅中に来れたのは良かったが。
全く元気でぴんぴんしている美夜と、家の奥で、やはり調子が悪いらしい美夜の母に、
「昨日と今日と、病院で点滴してもらって。後三日は少なくとも行かなきゃダメみたいで、ちょっと当分、学校休みますね」
かなり考えていた通りの状況に、沙夜自身、もやもやとした思いを抱える羽目になった。
「しかし美夜ちゃん……そういう話、好き？」
「えぇー。沙夜さんは嫌いですか？」
正直あんまり……と口にする沙夜に、美夜は少しだけ残念そうにしていた。
実際にそちらの世界に住む人――たとえば沙夜の養母のような。そういう人と暮らした事があれば、沙夜の気持ちもわかりそうだが。
「でも確かにあのお花屋さん、不思議な空間ですし！　沙夜さんの体験が本当ならきっと、透視とか共感とかそういう何か、不思議事が実際にあるに違いありません！」
しかし、自らそちらに飛び込みたがっているこの様子は、一応止めねばと沙夜は苦笑う。
「でも、内緒にしてって言ってたし。確かに表沙汰になれば、あの人達も困ると思うよ」
……。薫や夜織から、直接話されたわけではない美夜は、ぐぐ……と頷くしかない。
話題を変える必要を感じた沙夜は、すっと家の中を見回して、
「ところで美夜ちゃん、何時頃家出るの？」
「えっと、後一時間後です」
そっか。一時間あれば何とかなるなと沙夜は立ち上がり、
「台所と食材、使っていい？　夕飯作るよ」
……？　美夜は、沙夜が何を言っているのか、全く飲み込めないように首を傾げた。

「バイトまで美夜ちゃんは休んでなよ。朝もバイトで疲れてるでしょ？」
早朝バイト、母の付き添い、いくつかの家事、そして夜バイト。美夜の、今日一日の流れをきいた時から、沙夜はそれを心に決めていた。
「って――そんな、ダメです！　沙夜さんはお客さんなんですし、沙夜さんこそゆっくりしてください！」
「時間が勿体無いから、借りるよ。使ったらまずいものあったら教えて」
有無を言わせず台所に入り、冷蔵庫の中身や調理用具を確かめ、沙夜は腕まくりをした。
これまでの長い居候生活の賜物で、沙夜は一通りの家事は出来るようになった。
主婦のように手早く出来るかと言われれば難しいが、自分のペースで良いなら、普通にきちんとした仕事が出来ると思う。
「沙夜さん……あの――」
調理用具はどれも、豊富に揃っているわりに、しばらく使われた形跡がない。
おそらく、美夜の母は料理をしていたが、美夜はあまり得意ではないのだろう。
棚にはいくつか缶詰やインスタント食品があるが、新鮮な食材はあまりなかったので、沙夜は手早く献立を決める。
「パスタ作るね。後、お母さんにはお粥と」
「……」
この状態で作れるとしたら、そんな感じか。今度は美夜ちゃんと買い物に行ってみるのもいいなと、寂しい冷蔵庫を見て思っていた。
ぱっぱっと準備をし始める沙夜に、美夜は台所の入り口に立ったまま……やがて、じんわりと両目に涙を溜め始めた。
「――って、美夜ちゃん？」
焦り顔で振り返った沙夜に、美夜はぶんぶん首を振って涙を拭うと、
「ごめんなさい！　何かもう……沙夜さん、優し過ぎるから……」
そんなの、おかしいですよ……と。
沙夜がどうしてそんな事をしてくれるのか、全くわからないらしい美夜は、そんなふうに俯きながら呟いている。
「沙夜さんの方が大変なのに……いっぱい、しんどいことあるのに……」
陽美からの迫害っぷりなど、別に特に話したわけではないのだが。自分が養子であること、それでいくつも住む家を変わってきたことは、初日の帰り道で美夜には打ち明けていた。
「そうかなぁ……私には、美夜ちゃんの方が大変に見えるんだけど」
―私は……生活出来なかったことも、生活のために外で働いたこともなかったしなぁ―
環境は確かに次々と変わったものの、後見人という存在は確固としてあり、お金も自由に使える分はないが、衣食住は確保されていた。
対して美夜は、生きていくための糧を全て、この歳にして既に自分で得なければいけない。
それも病気の母親を抱えて……その不安はどれ程だろうと、どうしても心配になる。

「ほら、泣かないで。何か私、悪い事してるみたいじゃない」
ぐすっ。パスタのソースに使えそうな缶詰を棚から取り出しながら、沙夜はぽんぽんと、俯く美夜の頭を撫で叩いた。
「美夜ちゃんが笑ってくれると、何だか私、元気が出るんだから。たまにこうしておうち来てもいい？」
ばっと美夜は顔を上げると、何を言うべきかわからなかったらしく、とにかく必死で首をうんうんと振る。
―うん。何か本当、美夜ちゃんって癒しだ―この出会いがあった事が、今回の引越しでは一番の収穫だったと沙夜は素直に思えていた。
そうしてコンロへと向き戻り、夕飯作りを続ける沙夜の姿に――美夜は今度はマジメに。何かを真剣に考えているようだった。

そして美夜の出発直前。彼女が何を考えていたのかが、あっさり明かされる事になる。
「へっ……ぴーえっち、えす？」
突然美夜から手渡されたソレは、白く縦長の手の平サイズで、一昔前の携帯電話を彷彿とさせる有名な通信端末、プラス充電器で。
「沙夜さん、携帯とか何もないんですよね？昨日今日みたく待ち合わせに行けない時とか、どうやって連絡しようか悩んでて……これ、余ってるので、使って下さい」
―携帯が……余る？？―
沙夜には全くもって理解不能なことを言っている美夜は、しかし本気らしい。
「元々は母さんが使ってた物なんです。でも最近はもう、外には出れないので……費用も家族契約だから、私とは通話料タダですし」
そもそも……！　と、美夜はイキイキし始め、
「元々メールもタダの上、ネットは見れない単純端末だから通信費はかからないし、更に家族割キャンペーンで基本料タダなんです！全然使ってないけどだから解約してなくって、もったいないって常々思ってたんです！」
最早沙夜には、何が何だかさっぱりわからず、美夜の熱い勢いに頷くしか出来ず、
「本当は家族以外が使うのはダメですけど、これなら、全然お金かからずに、沙夜さんと連絡とれるから。わたし、沙夜さんと電話やメール……したいです」
最後の方は、しゅん……と。それが、一番の本心であるように、子犬のような目で沙夜を見る美夜だった。
「でも……大本の契約料金は、美夜ちゃんが払ってるんでしょ？」
常識的に考えれば、こうした物を借りるのは有り得ない事だろう。美夜もそれがわかっているから、先程あんなに考えていたのだ。
「わたしがわたしの料金を払うのは当然です。でも沙夜さんに渡す方は、元々タダです」
それは決して、嘘ではないらしい。どうやら美夜は相当、この手のキカイ系に強いようだ。
「……ありがと。じゃあ、美夜ちゃんにだけ、使わせてもらうね」

「メールだけなら、他の人とも大丈夫です。わたしがこの町にいる間は、良ければ好きに使って下さい」
何とかＰＨＳを受け取った沙夜に、美夜は、本当に嬉しそうにそう笑った。

「……」
でもなぁ……と。先畑家を出てから、沙夜は。既に門限らしい六時を過ぎている事もあるが。
「陽美さんとかにばれたら、何て言われるか」しかも全く、正直、使い方がわからない。
「明日また、美夜ちゃんち行ってきこ……」
それでも――本当に、この数日の間だけでも、これまでにない新しい世界が色々と広がり。いつまで続いてくれるかはわからなくても。
「嫌な事もあるけど……良い事もあるよね」
美夜から渡された白いＰＨＳを眺めながら、心からの気持ちで、穏やかに沙夜は笑った。

……ところが。
―ちょっと待って……！？―
新しい世界、新しい出来事というのは時に、立て続けのタイミングで訪れる事もあるのだ。
「――沙夜君。来週の土曜日に、私と一緒に携帯屋さんへ行こうか」
「……へ？」
狭間さんから突然、そんな話が出た時には。沙夜は自分の耳を疑って、そして、ちらりと陽美の顔色も伺わずにはいられなかった。
今夜も帰った狭間さんのおかげで、本当にあるか疑わしい門限や、六限以降サボりの件で陽美に怒られる事はなく。穏やかな食卓で、狭間さんから色々話しかけられたのだが。
「ところで沙夜君。身の回りで何か特に……変わった事が起きた、という事はないかね？」
「――はい？」
そんなの、ないですけど……と、狭間さんの意図が全くわからず、沙夜は無難にそう答え。

「そうか。しかしだね……もしも今後、何かあった時、遠慮なく私に連絡をとってほしい」
そうして、だから携帯が必要だろう。という流れになったわけだった。
「……」
陽美は始終黙り込んでいて、沙夜に向かってそんな事を和やかに話している父を、横目でこっそりずっと睨んでいた。
色々話したい事もあるからと。狭間さんにしては強引に、沙夜を連れての携帯屋行きがその後、決まってしまったのだが。
「まさか……もう持ってるなんて言えないし」
―そもそも、陽美さんの沈黙が怖過ぎだし―
出来れば何とか遠慮したい珍事態に、沙夜はひたすら頭を抱えるのだった……。

＊

美夜がようやく学校に復帰したのは、週が明けてからの事だった。

「沙夜さーん！　お昼ご飯、食べましょう！」

病気の母は一旦何とか落ち着き、もう少し悪ければ入院という事らしいが、不思議な程彼女の容態は、本当にまずい状態の一歩前でずっと維持されているらしい。

「ごめん、美夜ちゃん……私、お弁当なくて」

転校初日のお弁当事件以来、沙夜にお弁当は必要ないのよ！　という流れになってしまい、昼はひたすら毎日、水を飲んでしのいでいる沙夜だったわけだが。

「残り物、いっぱいあるんです！　私得意の炊飯器クッキング、伊達じゃないですよ！」

美夜はまたそんな謎なワードを口にしつつ、確かにやたらに量は一杯の、よく味の染みた煮物を持参していた。

水しか飲んでいない沙夜を昼に誘うのは、やはり気まずいのか、少しずつ話せつつある同級生とも、まだお昼の壁は越えられない。

「美夜ちゃんも……ちゃんとクラスで友達、作らないとダメだよ……」

沙夜は少しだけそう憂いながらも、うきうきお弁当を必ず多めに持参する美夜と、裏門でお昼を一緒にする事が、その後日課となった。

「ごめんね、ご馳走になって」

お詫びにまた夕飯作るねと言うと、美夜は、

「えへへへ、実はそれが目当てなんですよ！　だから遠慮なく食べて下さいね！」

美夜が学校に復帰する前から、何度となく、美夜の家にいっては家事を手伝った沙夜は、もうすっかり美夜の母とも顔見知りになった。

「直美さんはどう？　体調大丈夫？」

「何だか最近、沙夜さんが来てくれるようになってから母さん、調子良くて。沙夜さんのご飯美味しいって、少し食べてくれるんです」

そう……と沙夜は。直美の青白く痩せた体を思い出しながら、言葉を濁していた。

―沙夜さん。あなたにはわかりますよね？―

「本当に、わたしも料理、上手ければなぁ。母さんももう少し食が進むだろうに」

「……」

その美夜の空元気が、沙夜には辛かった。

美夜の母である直美は、美夜がいない時も、やって来た沙夜を歓迎して家にあげてくれた。

一見大人しげには見えるが、元々凛とした気丈な女性なのだろう。動く事すら辛そうな体なのに、寝床から出て沙夜を出迎えて――

―私はもう長くありません。だから……―

……沙夜が気付かずにいられなかったのは。直美が、若くして亡くなった沙夜の養母と、同じ顔色で、同じような薬を飲んでいたのと。

―お義母さんも……死んじゃう少しだけ前、不思議なくらい持ち直した時、あったな―

……わたしには、母さんがいるから。
沙夜と自分の境遇をあえて比較する時に、美夜は、だから自分の方が余裕があるからと。
何か出来ることがあったら言ってほしいと、親身にそう言ってくれた少女が……もうすぐ大切な身内を失ってしまう。

「ねぇ、沙夜さん。今日またあのお花屋さん、寄ってもいいですか？」
母さんに花を買っていきたいんですと、そう笑う美夜に、沙夜はノーとは言えなかった。
あれから沙夜は、夜織との遭遇率は減っていたのだが。花屋に近い郵便局に勤めているという薫や、その従弟らしい蛍が沙夜の帰る五時頃によく出入りするせいか、顔見知りという間柄には落ち着いていた。
―でも美夜ちゃんは学校休んでたから、全然行けてないわけだしなぁ―
「……あんまり、長居はしないでいこうね。直美さんも待ってるだろうし」
はい！　と素直に笑う美夜は、沙夜の真意をわかるはずもない。
―あんまりあの人達……関わりたくないな―
特にあの……薫と夜織とは、と。

―あんたら、やっぱり普通じゃないぜ―
―沙夜さんは、普通じゃないと思いますよ―
何故か二人は、まるで示し合わせたように、同じ事を沙夜に言う。
「……ほんっとに失礼な……」
「――沙夜さん？」
不思議そうにする美夜に、慌てて何でもないと言いつつ。
そう言えば「あんたら」と複数形で言った薫は、あの初日以外に何処で美夜を見たのか、少し気になった沙夜だった。
普通である事が普通じゃない。
薫も夜織も、言葉は違うが同じように言う。
―何つーか……沙夜さん、健気過ぎねぇ？―
最近よく話すようになった、後一人の青年、野球帽と白いTシャツのよく似合う葉月蛍は、そんなふうに言っていた。
葉月蛍は、あの三人の中では普通に見える。
―ちょっと見た目とか口調とか幼いけど―
二つ年下の夜織よりも子供っぽいのは難だが、すぐに人がぐさりとくるような事を言う薫や、何故か何度となく、沙夜が自分でも気付いていないような事を言い当てる夜織に比べると、蛍の話題はいつもマトモだった。
ＰＨＳの使い方とか、連絡先の交換の仕方。そうしてちゃっかりと、美夜以外では初の、沙夜のメル友になっているのも蛍だ。
「―ついに大型二種免許とったぜ！　これで俺も夢に一歩近づきんぐ☆―」
そんな、用件も何もないメールが入った時は、沙夜は何とも感動したものだった。

「―美夜ちゃんのお母さんの状態が悪くて、私に何か出来ることあるかな？―」
そう、メールで何となく相談した時、返ってきたのがさっきの言葉――「健気過ぎ」だ。
「―何で健気？―」
そう返すと蛍はその後、少し謎のメールを、
「―沙夜さん、お母さんに頼りにされるよ―」
それだけ返してきて、そこでそのやり取りは終わってしまったのだが。それ以外は普通に、何でもないメールをやり取りしていた。

ＨＲが終わると、今週は陽美も沙夜も掃除当番でないため、すぐ学校を出る事が出来た。
「―ちょっと用事が出来たので、先にお花屋行ってて下さい―」
しかし美夜からはそんなメールが入っており、
―一人だと……あんまり行きたくないけど―
それが沙夜の正直な所だったのだが。

「……」
とりあえず店が見える所まで来て、遠目から店の様子を窺ってみると。ちょうど夜織が、数人の女子高校生客の相手をしていて、板についた愛想の良い笑顔に。沙夜はアレ、っと違和感を持った。
「何あれ……すっごい営業スマイル……」
最初に美夜と話した時や、沙夜が店の前を通って話す時などは、あんなにあからさまな作り笑顔ではない。その辺り、無愛想な事を隠していない薫や、常時天然スマイルっぽい蛍とは、目先の夜織はかなり異質に思えた。
「あ、沙夜さーん！　遅くなりましたー！」
女子高校生が去るのを待っていたら、美夜が追いついてきた。すっかり裏門の塀を一人で越えられるようになった美夜に、沙夜は少し苦笑いしつつ、
「今夜織さん忙しいみたいよ。ほら」
「あー……本当、ですね……」

美夜は、その様子を見て、しばらくその場で立ち止まってしまった。
「……」
どうした偶然なのか、美夜も何かその光景に思うところがあるようで――ともすれば、切なそうな。そんな顔をして営業スマイルの夜織の方を見る美夜に……沙夜は、がーんと。
―あれ……これ、ちょっとまずくない？―
美夜は多分、今……夜織のあの作り笑顔に、沙夜と同じように衝撃を受けているのだ。
しかしその方向性は、沙夜とは違って、
「何でかな……何か、辛そうに見えます……」
そう呟いて今まさに、涙しそうな勢いだった。
それはおそらく、初めて会った時の夜織が、美夜の前では本当に自然な笑顔をしたからで。それが失われている事を辛く感じるとしたら、つまり、自然な彼に好意があったという事で。
「美夜ちゃん……まさか……」
一目惚れ……？　皆まで言えなかった沙夜は、ただ呆然と――息を飲んだのだった。

＊

何故だか毎日。放課後に花屋に通う事まで、沙夜と美夜の日課となってしまった。

「沙夜さん、遅くなってすみません！」

「う……うん……」

週末の夕方、五時ジャストに花屋に入る。

客足の少なくなる時間帯から、閉店までにフラワーギフトを作るのを手伝ってほしいと、夜織からの直々のバイト依頼だった。

「以前は薫さんが手伝ってくれてたんですが……就職されてからは忙しくなっちゃって」

夜織は花屋などやっているわりに、そうした華やかな飾り物の演出というのは苦手らしく、ボックスフラワーやフラワーバスケットなど、どうしても需要はあるため、そうした対策で何とかニーズに応えていたのだった。

「育てる方が得意なんです、僕」

この花屋にある花の半分以上は、この屋上で自家栽培されたものらしい。

「凄いですね！　季節外のお花もあるのに！」

ひたすら感動している美夜はしかし、店では何を手伝うでもなく。実は依頼をされたのは沙夜で、美夜もそうしたアート系はもっぱら苦手らしく、単に沙夜についてきて、花屋に好きに入り浸っているのだった。

しかし夜織も、沙夜の付き添いとしてくる美夜に何の文句もあるわけでもなく、

「美夜さん。これどうぞ、お母さんに」

「すみません……いつも頂いてばかりで……」

「いえ、どうせ閉店後は処分するものなので」

むしろこれ、ひょっとして私はダシの状態？

こっこっと沙夜は、生花を完全な我流で様々に飾りつけながら、釈然としない思いで初めてのバイトに精を出すのだった。

以前薫が作ったという、数々の見本写真を見るにつけ。やるせなさが沙夜を襲う。

―何でこんな隙のない物作れるの、アイツ―

薫も全く我流で作っていたらしいが、女性の沙夜よりも優れた美的感覚を窺わせるような、細かい所にも気配りの行き届いたアレンジに……それは悔しいとしか言いようがなかった。

薫も夜織も、そして蛍も。この三人には、ある共通していることがあった。

「ええっ！？　月一回の店内大掃除はいつも、蛍さんとされてるんですか！？」

「はい。業者さん顔負けのレベルでキレイにしてもらえますよ」

この三人は、一般女性以上の家事能力を持っているのだ。薫に至っては料理も非常に得意なようで、専業主婦の手早さと匠の技巧、両方を有するという反則ぶりらしい。

「凄いですねー……」

家事が苦手でバイト中心であるという美夜は、ただひたすらに、きらきらした目で、三人とよく楽しそうに話しているのだった。

「それでいて皆さん、お仕事も毎日されてるなんて……わたしなんてまだまだですね」
薫は郵便局の集配営業部にて、非常勤勤務。蛍は私設マイクロバスの専任運転手に就職。そして夜織はこの花屋と、若いわりに生活感あふれる彼らだった。
「あの二人は確かにそうですけど……僕は、兄の援助で自営業をしてるだけですから」
「でもこんなに素敵な花屋じゃないですか。本当に皆さん……ちゃんと社会人ですね」
「……」
……そうなのよね、と沙夜は。
この花屋で彼らと会う時間が増えるにつれ、段々と、彼らがそんなに違和感のある存在に見えなくなってきたことに……そもそも何故違和感があるのかも思い出して悩む。
失くし物探しだけでなく、気が付けば薫の周囲にある物がふわふわ浮かんでいるような異常な光景を目撃したり。
蛍がこうなると言ったことは大概当たって、養母と似たような空気を感じる事があったり。
沙夜がちょうど喉が渇いた時などに限って、はいと、しかも飲みたかった物を出してくる夜織の、キレイな笑顔に空恐ろしくなったり。
そんな事が立て続けに起こるにも関わらず、沙夜は、慣れてきている自分を感じつつあり。しかも何故か、美夜が彼らの近くにいる時はそういう事はほとんど起こらず。
—異常なんて……勘違いだったのかも—
やっぱり自分達は、薫や蛍、夜織も含め、本当は全員マトモだと感じている沙夜がいた。
しかし夜織は、そんな沙夜の思いを錯覚と断定するかのように、
「その辺りはあの二人も、そして沙夜さんと美夜さんも。不思議なくらい、真っ当ですよ」
えっ？　ぽかんと首を傾げる美夜に、夜織は何処か影のある顔つきで先を続ける。
「二人共……自分が特別だっていうことを、全然気にしてませんからね」
「特別……？」
だから殊更、社会でも家族でも、何処に壁を作るようなこともないのだと。
儚げにも見える顔で彼はそう呟いていた。
「夜織さんは……違うんですか？」
美夜も実際、彼の真意を何処までわかれたか怪しい状態だが——憂いげに潤む目で自分を見上げる少女に、いくらか夜織の心は和んだようだった。
「……警戒心はみんな、持っていますけどね。意識するからこそ歪む者と、意識していても普通でいられる人達は、多分異質ですよ」
その夜織の台詞は沙夜にとって。
過ぎた日を思い出させる痛い言葉だった。
—おかあさんは……普通じゃないから—
最初にそんな事を言ったのは誰だったのか。

普通じゃないから……あんなに優しいのに、周りの人から怖がられ、一人にされたのか。

そんな恐怖を抱いた誰か。いったい本当は、どちらが歪んでいたというのだろうか？

「……っ」

ぽき……と。手にしていた生花の茎を折ってしまい、沙夜ははっと我に返った。

「――沙夜さん？　大丈夫ですか？」

「あ――……ごめん」

花、ダメにしちゃった……と。俯く沙夜に、夜織は困ったような顔をして笑い、

「今週はここまでにしましょうか。週末は、ゆっくり休んでくださいね」

「そっか、作業は平日の夕方だけなんですね。沙夜さん、土日は休めそうですね」

良かったと美夜は、何故か覇気のない沙夜を疲れていると思ったらしく、そう笑ったが。

この土曜日には――沙夜には狭間さんと、携帯屋行きの予定があったりするのだ。

――しまったなぁ……アレ、どうしよう――

結局、上手く断る口実は特に見つけられず、陽美の機嫌は日増しに悪くなっており。

段々、狭間さんがいる前でも、沙夜を罵る事が増えた状態になってきていた。

誰にも話せずに、陽美の嫌がらせに耐えてきた沙夜には限界が近づきつつあった。

しかし沙夜に自覚はなく、ただ心身には、新生活の疲れが早くも出始めていた。

ああ、もう……と。

夜バイトに行く美夜と別れた後、思い切り両手を広げて背伸びをして。沙夜はしっかり、夜の空気を胸深くまで吸い込んだ。

「らしくないぞ、私……こんなの、むしろ、今までより幸せなくらいじゃないの」

自分に言い聞かせるよう、昔の事を思い出す。

幼少の頃――多分幼稚園くらいの頃までは、あまり覚えていないが、可愛がってもらった気もする。我が侭も少しは言った気がする。

物心がつき、自分を面倒くさそうに迎える新しい家族の顔を見るたび、なるべく迷惑をかけてはいけないのだと。自然に沙夜はそう思うようになっていった。

「そう言えば何で、いつも……」

――別に望まれていないのに、沙夜は彼らに引き取られたのだろうか。引き取り先の人選、基準はいったい何だったのか。

その答えはやがて、狭間さんの正体が分るその時に訪れる事を――この夜から動き出す運命と共に、沙夜は知る事になる。

＊

「遅いし！　何であんたいつも、六時までに帰ってこないの！？」

帰り着くと、玄関先で陽美が怒りの形相で、まさに仁王立ちという感じで待ち受けていた。
「……すみません」
狭間さんから直接、門限を言われたわけではない沙夜は。美夜の家によってから帰ると、どうしても六時までには間に合わず、あえて意識しないようにしていたところがあった。
それでも陽美がそれをルールだと言うなら、謝るしかない。沙夜にも非はある事だろう。
「ちょっとこっち来なさい。今日こそ自分の立場っての、思い知らせてあげる」
強引に腕を掴まれ、居間の方へと引っ張っていかれる。
狭間さんや奥さんの寛ぎ場であるそこには、沙夜はなるべく邪魔しないようにしていた。夕方の今は奥さんは台所にいて、二日ぶりに帰った狭間さんがゆっくりＴＶを見ている。
「お父さん。これ、見てよ」
「陽美……どうした？」
陽美の剣幕に驚き顔の狭間さんの前、陽美は沙夜の鞄を強引に取り上げると。
「――……！」
美夜から借りたＰＨＳを迷いなく取り出し、テーブルに叩きつけるように放り出した。
どうやら常日頃から、沙夜の持ち物検査も無断でしていたらしい。隠そうと思っていた沙夜が甘かったのだろう。
「沙夜君……これは……」
「――……」
あの……と、事情を口に出そうとしかけて、
「盗んだに決まってるじゃないの！　沙夜にこんな物、契約出来るお金なんてないし！」
「――違います！」
信じてもらえるとは思えなかったが。そんな言いがかりはさすがに、黙って受け流す事は沙夜は出来なかった――それを貸してくれた美夜の、嬉しそうな顔が脳裏をよぎっていく。
「それは友達から借りた大事な物なんです！　黙ってた事は本当ごめんなさい、でも……！」
「何言ってんの、そんな物貸す人間なんて、普通いるわけないでしょ！？　どうせならもっとマシな言い訳考えなさいよ！」
ＰＨＳを取り戻そうとしたが陽美に遮られ、動揺して声が出せずに沙夜は硬直してしまい。
「……」
狭間さんはそんな二人を、とても硬い表情で見つめ……ゆっくりソファから立ち上がると。
――パシン、と。
何が起こったのか、沙夜にも陽美にも一瞬わからず。
強い勢いで打たれた頬を押え、茫然とする陽美の姿に……沙夜はやっと我に返った。
「狭間……さん？」
二人の前で彼は厳しい顔つきをして。陽美をまっすぐに見つめていた。
「お前がずっと、沙夜君に何をしてきたか……気付いていないと思っているのか、陽美」

「……！？」
その声は、今までの狭間さんとは一線を画す、厳しさと重さに満ちた。父親ですらない――何か大切な決意を秘めた男の声だった。
「沙夜君は被害者だ――そしてお前も、私の仕事に巻き込んだ被害者だった……あくまでこれまでは」
彼は初めから、沙夜を同居させた事への娘の反感など覚悟していたかのように。
「今のお前は、ただの加害者だ。そんな事もわからないのか、高校三年にもなって」
「……何よ……何よ、偉そうに……！」
頬を押さえて歯を食い縛り、涙もなく陽美はぎっと父親を睨み上げ、
「全然帰ってこないくせ、父親面しないで！　アンタなんか何がわかるっていうの――！」
沙夜の鞄を叩きつけて、居間から飛び出した陽美を。沙夜は反射的に追いかけていた。
居間には、憮然とした顔つきで立ち尽くす狭間さんと――残されたままの白いＰＨＳが。
新しいメールの着信を告げつつ、ぶるぶる寂しげに震えていたのだった。

自分の部屋に飛び込むと、陽美はすぐに、鍵をかけてしまった。廊下側に取り残された沙夜は、一度だけダンと扉を叩いて、
「陽美さん――！　ごめんなさい、私――」
何を言えばいいかは全くわからなかったが。少なくとも、先程の父と娘の亀裂の一端は、自分にある事を……謝らずにいられなかった。
「何が気に入らないか言ってください！　私、努力しますから――陽美さんに迷惑かけないように頑張りますから！」
門限を守らないとか、そんな表面的な事ではないはずなのだ。沙夜がここに現れた時から、陽美はずっと沙夜を拒絶しているのだから。
「陽美さん……！」
それは決して、沙夜の非ではない。
それでも沙夜は。
こんな形で誰かを傷付けるのなら、自分が頑張らなければいけないと――もう一度ダン、と扉を叩こうとした時。
「うるさい……」
扉の内側から聞こえてきた、呪うように強く、しかしか細い声に。沙夜は必死に耳をすませ、陽美の言葉の続きを待った。
「沙夜。アタシ、あんたのそういう所が嫌い」
「――え――？」
「何でいっつもそんなふうに、しれっとしてられんの？　……悪いのはあんたなのに」
――――。
沙夜は、白く閉ざされた扉の向こう。
目端に薄く溜められた涙と、歪んだ笑みをたたえる少女の姿を、まるで直接目に映したかのように全身を凍らせる。
「あんた、自分がどれだけ迷惑か――考えたことないの？」
だからそんな、平静にしてられるんでしょと。

忌々しそうに、目障りそのものという声で、陽美はその結論を告げた。
――そうした沙夜そのものが不快であると。

「……」

その答えを、はっきりと伝えられて――全く動揺しないでいられる誰かはいるのだろうか。
沙夜は、ふら……と、扉の反対側の廊下の壁に倒れるようにもたれかかると。

―助けて、美夜ちゃん……――さん……―

いつかと同じ、救いを求める悲鳴を胸に。
ついに受け入れられる事はなかった家を、拙い足どりで飛び出していたのだった。

制服のまま、せっかく借りたＰＨＳもなく、狭間家の居間に置かれたままである事にも、しばらく気が付けなかった。

「……どう、しよう」

逃げるようにあの家を出て行って、真っ先に思い出したのは美夜のことだ。
―美夜ちゃんなら泊めてくれるだろうけど―しかし苦労している彼女に、これ以上負担をかけても良いものか……その思いがずっと、沙夜の足を止めているだけで。

「今行っても……直美さんにも迷惑かけるし」

美夜は多分まだ夜のバイト中だ。沙夜を家にあげようとすれば、病身の直美に起き出してもらわなければいけない。
ＰＨＳもない以上、相談する事も出来ない。

―あんた、自分がどれだけ迷惑か……―

「……」

やっぱり出来ない……そう項垂れて、美夜のことを頭から消そうとしたその時だった。

―……え？―

その声は確かに。沙夜の何処か深い所へ、

―美夜……泣いてる――？……―

夜のしじまも、立ち並ぶ建物も全て飛び越え、直接、沙夜の魂へと届くように。
美夜が一人ぼっちで肩を落とし、暗い街の何処かで闘っている姿が、何故かありありと唐突に……沙夜の暗い視界を占拠していた。

「……」

沙夜はその光景を、全く疑う事はなく――

「……行かなきゃ」

つい先刻まで自分の中で吹き荒れていた嵐も、まるで忘れたのかのような強い足どりで。
夜の街に向かって、一度も行った事のない場所を正確に思い描きながら――ゆっくりと歩き出していた。

鞄も何も持たずに飛び出した沙夜は。

＊

「えっ……沙夜、さん！？」
終電の時刻も過ぎてしまった頃。
ようやく想定外の時間外労働から解放され、バイト先の建物から出てきた美夜を、建物の裏路地で待っていた沙夜に――美夜は慌てて涙を拭いながら、驚きの声をあげていた。
「どうしてここが……しかも、こんな時間に」
「――ごめん。家出してきちゃって、私」
ナハハと、その一言だけで沙夜の切迫状況を察したらしい美夜に、あえて沙夜は軽く言う。
「それなら、わたしの家に行って下されば！」
家で帰りを待っててもらえば良かったのにと、沙夜を受け入れる選択肢を全く前提として、そう焦っている美夜に。沙夜は胸が痛みつつ、ううんと小さく首を振った。
「何か、美夜ちゃんに何かがあった気がして。気がついたらここに来てたんだ」
「えっ……？」
美夜はどきっとしたように、体を硬直させた。
「こんな遅くまで仕事って、何かあったの？」
「……」
俯いて黙り込み、かなりの間ためらった後……美夜は、意を決したように顔を上げた。
「……一緒に帰りましょう、沙夜さん」
そうしたら話します、と。
沙夜の不自然に気丈な様子に、美夜なりの危機感を持ったのか、そう口にする強い目に。
「――まいったなぁ」
美夜の家に行く事への躊躇いはお見通しかと、わかったと言うしかない沙夜なのだった。
早い話、と。
「バイト……クビになっちゃいました」
「――え？」
繁華街を抜けて、歩く程に暗さの増していく夜道を帰路につきながら、美夜は淡々とそう話し出した。
「もう随分古いパソコンだったんですけど……わたしが使った直後に、動かなくなって」
彼女曰く、その店では必需品のパソコンが、美夜が使うまでは何の不調もなく動いていたにも関わらず。美夜の次に店長が使った時、全ての記録を道連れに壊れてしまったらしい。
「お客さんの情報とか全部入ってたので……何とか今日中に復旧させろって言われて」
技術者は最短で明日にしか来られないらしく、責任をとって直せ、直せないならクビだと、はっきり言われたという事だった。
そして結局。今まで粘っても何ともならず、店長から追い出されたという事だった。
沙夜は正直、パソコンとかそういうものは、授業でさわった事くらいしかない。なので、淡々とそう話す美夜が涙する程に、どれだけ責められたのか……それを思い顔をしかめた。
「それ、店長が壊したんじゃないの？」
「違うと思います」
あっさりと断言する美夜は。何故か、確信を持ってそう言っているようだった。

「だって美夜ちゃん、キカイ系強いのに」
「……はい、苦手ではないです。だからこの時間まで頑張りましたし」
でも。沙夜の方を見ずに、美夜は俯く。
「よくあるんです……同じような事が」
「え？」
「わたしが使ってる時には調子がいいのに。その後に、もうどうにもならないレベルまで急に物が壊れちゃう事……一回や二回じゃ、ないんです」
だから何度も、バイトも変わっている事実を明かす美夜だった。
「それが本当、酷い時は何度でも、何処でも起こるような時もあって……その度母さんは、わたしを連れて引越しを重ねてきたんです。……一番酷かったのは、わたしが部屋を出て扉を閉めた直後、家が傾いた事もありました」
だからもう人を巻き込みかねない集合住宅は借りず、一戸建ての賃貸に入っているのだと。
「……何、それ」
沙夜はふつふつと。自分の中を湧き上がってくる、怒りに近い感情を自覚し始めた。
「それって……本当に美夜ちゃんが悪いの？」
「……」
ただの偶然じゃないの？　厳しい顔色で言う沙夜に、美夜はますます俯いてしまう。
「偶然で……こんな事何回も重なりますか？」
「それはわからないけど……でも……」
沙夜はぎゅっと両手を握りしめ、俯く美夜を見ずに先を続けた。ともすれば――叱咤激励ともとれるような、突き放した声色で。
「美夜ちゃんは普通だと思う。そんな異常なことの責任……とる必要、ないのに」
その沙夜の声に、美夜は少しだけ哀しそうに。
「……」
沙夜さん……と。それも、沙夜の方を見ずに、小さく呟いていた。
「わたし……普通でも、そうじゃなくても。沙夜さんは、優しい素敵なヒトだと思います」
「……――？」
その言葉にどんな思いが込められていたのか……この時の沙夜にはわからなかった。
意味を尋ねる前に二人は先畑家に辿り着き。そこで――容赦なく訪れていた運命の足音に、安らぎの夜の喪失を知る。
「そんな……母さん！？」
「直美さん！　大丈夫ですか！？」
家の中では、ベッドから倒れ落ちて苦しげに胸を押さえ。止まらない咳き込みを続けて、血を吐いてもがく直美の姿があった――

＊

黄ばんだ白い天井と、三つ穴のコンセント差し込み口がいくつも、床近くに連なる壁に。そこからのびるコードに繋がる、点滴の台や、上下に動く電動ベッドの上……ようやく少し落ち着いた直美に、沙夜と美夜は息をついた。

「急変ですね……詳しくは明朝に、医師からお話があると思います」
珍しい金髪の、外人らしい看護師が説明する。この町に来てからのかかりつけである病院に、時間外だが何とか救急搬送してもらった後。
直美のたっての希望で、人工呼吸器などの使用はせず、点滴と酸素の吸入のみで様子をみる事になり。その晩はそのまま個室内で、美夜と沙夜も泊っていいという事だった。
「あの……こんな遅い時間に本当に、有難うございます」
「先週から状態は良くなかったのですから。入院時期の判断を誤ったのはこちらですよ」
看護師は苦笑したように微笑むと、一礼して退出していった。
沙夜はそのやりとりを眺めながら、
—私がすぐ家に行ってたら……もう少し早く、直美さんが大変なことに気付けたのに……—
結局どうすれば良かったのか、そればかりが頭をまわり、ずっと顔をしかめ続けていた。

「良かった……母さん、大分楽みたい」
美夜は、そんな沙夜の心を知ってか知らずか、
「沙夜さんが近くにいると、いつもそう……空気がキレイなのかな……」
わけのわからない事を言いながら直美の手を握る美夜に、沙夜は困惑するしかない。

「沙夜さん。先に眠ってください」
「美夜こそ。今の内に寝ておかないと」
朝には先生、すぐ話しに来るんでしょ？
苛立ち混じりでそう言う沙夜に、美夜は、一瞬何故かポカンとしていたが。
「……有難うございます」
沙夜とは対極のような、穏やかな笑顔でそう言って、遠慮なく寝袋に入っていった。
「……」
美夜の言う通りというわけではないのだが……直美はさっきまでの苦しみが嘘のように、穏やかな顔で眠っており。そう言えば養母も、最後まで家にいた事を沙夜は思い出していた。

—直美さん……すぐ横にあった家の電話すら、かけられないくらいひどかったのに……—
沙夜と美夜が駆け寄った後……美夜が薬と水を取りに違う部屋に行っている間、彼女はそんな体をおして、ある物をベッドの下から取り出して沙夜に託していた。
—お願いです……私が死んだら……—
さすがに詳しく事情はきけなかったものの。美夜には隠していたらしいそれを、沙夜は、どのタイミングで美夜に打ち明ければいいか。直美の寝顔と美夜の寝息を横に、うぅん……と悩み続けていた。
「頼りにされるって……こういう事？」
蛍からの謎メールの意味を、今頃噛みしめる。
—やっぱり普通じゃないな、あの人達—
ぼんやりとした頭で、沙夜は直美の横に座り、静かに様子を見続けていた。

翌朝。

美夜が医師の話を聞きに、別室に行く間、直美のそばにいるように頼まれていた沙夜は。しかし清拭をするという事で部屋から出され、お金は全くないものの、何となく売店の方へ来てみていた。

「美夜に何か、食べさせなきゃ……」

きょろきょろと、何故かＡＴＭを探してみる。ブレザーのポケットには、直美から預かった何かがまとめてつめられている。

「――って」

「――あ？」

そんな挙動不審の沙夜を。朝も早くから、似合わぬ場所にいる黒い青年が見咎めていた。

「何やってる、あんた」

「薫さん……どうしてここに？」

売店で何やら、朝食らしき品々を買っていた薫の姿に。沙夜は心底首を傾げたのだった。

なるほどね、と。薫は直美の病室で、先程仕入れた朝食をつまみながら、

「もう一人の姿をここでよく見かけたのは、このせいか」

直美が眠っているのを良い事に、またそんな言い草をするので。沙夜は一気に不機嫌顔になりながらも……薫の声は全然軽くない事も気が付き、黙り込むしかなかった。

「ここ、うちのお袋も入院してるんだ」

「えっ……そうなの？」

「本当に、勝手な奴でさ。父なし子でおれを生んでおいて、おれが高校の頃に男とどっか行きやがった。それが病気となるやいなや、もう一度会いたい、許してくれとかいって、帰ってきやがるんだから」

「……」

――突然そんな、ヘビーな過去を話されても――

唖然とする沙夜に、薫はふっと振り返ると、

「夜織の言う通りだな。あんたには何でか、いらない事まで話したくなるみたいだ」

そう穏やかに笑い、沙夜の肩をぽんぽんと、優しく叩いていた。

「今日はおれも一日病院にいる。何かあれば呼べよ」

そう言って、自分の母の病室番号と、メールアドレスらしき横文字を書いたメモ書きを、さらさらとその場で書いて沙夜に手渡して。面食らった沙夜がお礼を言う余裕もない内に、薫は病室から出て行ったのだった。

「……って……」

それ、どういう意味。沙夜はまた懊悩する。

「呼んでいいって……何で？」

ただ単に、顔見知りに過ぎない自分達なのに。

――そりゃ、二人だけだと心細いけど……――

それでも美夜は、医者の話は一人で聞けると気丈に言って。沙夜にも短い間だが、仮眠をとれる時間まできちんと配分してくれていた。

「何か……みんな、しっかりしてるなぁ」
純粋に沙夜は、それは感心してしまう。そう思うと、陽美一人に拒絶された程度で、家を飛び出す程に動揺した自分が情けなく思えた。
自分と彼らで、いったい何が違うのか……今の沙夜には何がベストな事なのだろうか？
やっと少し調子が戻って、沙夜がベッドの横に戻って座ろうとした――その時だった。
――……！――
「――――え――――？」
美夜……？　と。
昨日の夜と同じ――突然頭に響いてきた、今度は泣き声ではない、美夜の叫び声。
直美の容態に関する医師からの話が終わり、色々な動揺を一人堪えるべく、病院の中庭で呼吸を整えようとしていた少女に。
「何――……誰……！？」
突然、人影の少ない朝の中庭に現れ立った、暗い色の背広を着た数人の男達。
彼らは美夜を強引に取り押さえると、すぐ近くに停めてあった白いバンに連れ込み……そのまま病院を出て何処かへ消えてしまった。
「えっ……うそ……！？」
その、あまりに唐突で、わけのわからない異常な光景に。沙夜はとにかく急いで部屋を出て、行った事のない中庭の方へと全速力で駆け込んだ。
「合ってる――景色は同じ、合ってる……！」
頭にずっと響き続けていた美夜の叫び声は、いつしかプツンと途絶えてしまった。
――少なくとも絶対……美夜、今はこの病院の何処にもいない……！――
怖い程にその確信があった沙夜は、急いで中庭から出て、白いバンが去っていった方へ駆け出そうとして――
「沙夜さん！？　何してんだ！？」
「うわっ、危ない！」
きき―っと。信号も考えずに道路を渡ろうとした沙夜に、慌ててブレーキをかけた車から、見知った二人が降りてきた時は。
……運命って本当にあるのかなと。沙夜は、思わずにはいられなかった。
「蛍さん、夜織さん……！」
その沙夜の尋常でない様子に、うんうんと、蛍が沙夜の両肩を掴んで落ち着かせるように真面目に頷き、
「美夜が攫われた……！　たった今、何処か連れていかれちゃった――！」
「――ぁんだってぇ！？」
沙夜以上に一気に驚愕の顔色となった蛍と、
「美夜さんが――攫われた？」
無表情のまま、時間が止まったように顔色を硬めた夜織に。沙夜はただ、助けてとだけ、無我夢中で二人にしがみついていた。

＊

とにかく、落ち着いて話を聞かせてほしい。
薫に会うため病院まで来たらしい蛍と夜織が、沙夜を連れて直美の病室に行くと。その場で薫にも電話を始めた。
「薫兄の方は相部屋だからな。こっちの方がゆっくり相談出来るだろ」
冷静な顔で言う蛍に、沙夜は緊迫した顔色のまま頷き。病人がいる所にすみませんと頭を下げる夜織に、ぶるぶると首を横に振った。
「――うん。薫兄、すぐ来るって」
そう言うと蛍は、どいてどいてーと、何故か扉の前の空間を広くあけるように促した。
「って……――えええっっっ！？」
次の瞬間……沙夜は本気で、我が目を疑った。
扉が突然、不自然にぐにゃりと歪んだ――
沙夜にはそう見えた。

「何があった！？」
その一瞬の錯覚の後に、何故かその場所には薫が立っていて。
「今、沙夜さんの意識をそのまま伝えます」
何の断りもなく、座り込む沙夜の額に夜織が右手を当て。もう片方の手は薫の額に当てて、突然現れた薫は、なるほどとすぐに頷いた。
……目前で展開されるあまりの事に。
最早動揺など通り越して、逆に頭が冷えた沙夜は、こう呟くしかなかった。
「アナタ達……超能力（サイキッカー）、者？」
それも多分、いわゆる空間跳躍（テレポート）や読心能力（テレパス）。
前にみた薫のあの能力は、美夜が言っていた通り透視（サイコメトリー）ではないだろうか。
漫画や小説はあまり読んでいない沙夜だが、そうした超常現象の分類は大体知っていた。
……養母がいったいどういった人間なのか、知りたいと思った時があったから。

「何だ、今頃納得したか――悪いがそうだよ」
「無理もないですよ。一応これでも、普段はずっと力を抑えてますからね、僕達」
しれっとそんな事を言う、薫や夜織と、
「いいなー、薫兄と夜織はそんな制御出来て。俺なんて視えたら視えっ放し、視えない時はとことん視えないし」
直美の意識がないのを幸いとばかり、蛍までそんなふうに彼らと同調するのだった。
しかし今は。彼らは異常な者であると――そんなわかりきっていた事に、驚く場合ではないと。沙夜は不甲斐ない自分に喝を入れる。
「じゃあ、アナタ達ならわかる？　どうして美夜が――」
攫われるような目に合うのかと――自分は普通ではないと語った美夜を思い出しながら、そう口に出しかけた沙夜に。
――それは、と。

「美夜は、ずっと監視されていました――」
あの子の父親に――と。

沙夜と、そして場にいた三人の普通でない青年達は。そう言って酸素のマスクを外し、電動ベッドをリモコンで起こし起き上がった彼女に――一斉に驚きの顔を向けた。

沙夜は、驚きと心配の両方で焦りながら、
「直美さん――大丈夫なんですか！？」
ベッドに駆け寄って直美の横に両膝をつき。
そんな沙夜に、長い髪を肩の上で束ねながら、直美は優しそうに微笑み。そっと沙夜の頭に、まるで撫でるような形で手を置いた。
「……貴女は、事情を知っているようですね」
すっと、表情の硬いままの夜織が、冷淡にも見える目で直美の方を見る。直美はその目の理由を知ってか知らずか、困ったように笑う。
「驚きました。美夜にいつの間に、こんなに沢山お友達が出来てたなんて」
広くはない個室を占める人影を直美は見回し、何故かにかっと笑う蛍や、無愛想な薫など、ともすれば悪いお友達とも見えそうな面々に。有難うと、青白い顔で笑っていた。
そして改めて、沙夜の方を真剣な顔で見る。
「沙夜さん。昨日お願いした事……引受けていただけますか？」
「えっ……」
「私に何かあった時は、美夜を連れていってほしい――……あの子を、守ってほしいと」
昨晩のあの時……そう言って直美は沙夜に、美夜名義で貯めていたという預金通帳と印鑑、そしてキャッシュカードを託していた。
「受けていただけるなら、全てお話しします……あなた達について、私が知る現実を」
「私達の……現実……？」
直美の声は、力は失われていないものの、小さく細く。青年達は静かに見守り、沙夜と直美の邪魔をしないようにしている。
沙夜さん、と。まっすぐに沙夜の目を見て、差し迫った顔色で尋ねる直美に、
「そんなの、引受ける気がなければ――私はここにいません」
沙夜ははっきりと、強い気持ちでそう答えて。
安心したように頷いた直美は、
「やっぱり……運命というものは、確かにあるのでしょうね」
まるで、美夜を見る時のような優しい目で。
沙夜の頭をもう一度撫でて柔らかく笑った。
そして。続く一言で直美は驚くべき真実を告げる。
「沙夜さん。あなたと美夜は、全く同じ血を分けた――実の双子なんです」
「……え……――？」
沙夜は初めは。何を言われたかがさっぱりわからず、頭を真っ白にして直美を見返し。

後ろで見守る三人の青年は、やっと納得がいったというように……互いに顔を見合わせ、頷き合っていたのだった。

事の始まりは。

先畑直美の実の妹、藤桜由穂（ふじさくら ゆほ）――笑い者になる事が常の超常現象研究家である彼女が、「異常な」双子の娘を授かった時から起きた事だと、直美は静かに話し始めた。

「由穂は同じ超常現象研究家である基囲学（もとい まなぶ）と結婚し、結婚後も研究を続けました。そして――よりによってそんな彼女の子供として、生まれた直後から超常現象を起こし、特殊な脳波を持つ子供が生まれてきたんです」

夫である学は狂喜し、由穂も研究者としてのそれまでの不遇から、内なる悪魔の囁き――自らの好奇心に負けてしまい。

「沙夜さん一人では特に何も起こらなかった。けれど美夜はそこにいるだけで、周囲の古い機器が――壊れるか購入時のような好調さに戻る。そして二人が揃った時は、同じ場所にいる者全て、若返ったように調子が良くなる」

だから自分も、こうして話せているのだと、沙夜を見て直美は儚げに笑った。

「美夜は特に、研究用の機器にも全て影響を与えてしまうので、問題視されたようです。そして――由穂と学は、美夜を研究するため。冷凍標本化する事を決意しました」

沙夜の近くにいると特に、美夜の謎の能力は強まり。しかし沙夜から遠く引離し、成長も止まるような低い体温に維持すれば、影響が弱まる事を彼らは見つけたらしい。

「そして二年――……二人は、美夜の研究を続けました。けれど――」

そこまで話して直美は初めて――沙夜の事を、とても痛ましいような目で、申し訳なさげに見つめていた。

「その間、沙夜さんの事は由穂が育てて……何か超常現象が起こらないか、観察するはずだった由穂は」

その逆に――と。実の妹の過ちを嘆くように、直美は両手を握りしめていた。

「沙夜さんを育てる内、由穂は後悔し始めたのです。大切な娘を研究材料とした事を」

「……――」

「あの子がずっと誤魔化していた、人として――母親としての良心の呵責。二年の時間が流れる内に、それはついに限界を超えた」

そうして藤桜由穂は。学に黙って、沙夜を信頼出来る後見人に託し、美夜を解凍し――

「私に全ての事情を話し、美夜を私に託して。学と話をつけるために、研究所に戻って――彼に、殺されたのです」

その直美の声を、間近で聞いていた沙夜は。

――沙夜、と。

自分と同じ亜麻色の髪と、灰色の目をした女性が自分の名を呼んだ声を――どうしてか唐突に。記憶の底から手繰り上げていた。

幻想を振り切るかのように、沙夜は残酷な現実の黄ばんだ白い部屋に戻る。

「直美さん……それじゃ、あなたは……」

「ええ。私は美夜の本当の母親ではなく……美夜と沙夜さん、二人の伯母です」

――それまで沙夜はどれだけ。血の繋がった誰かに会ってみたいと思ったかしれないのに……実際そうした状況になった今は、何故か、どうしても現実感が持てなかった。

多分その原因である、非日常過ぎる様々な出来事や、異常な青年達の存在。そして――

「父は――母を、殺したんですか」

「ええ。研究組織の力を借りて、秘密裏に。そして、私と美夜を監視し続けていました」

真剣に全て受け止めれば壊れてしまいそうな現実に。心を麻痺させるしかなかったのだ。

そしてその後。美夜は直美が庇い続けて、沙夜の方は、託された後見人が行方を晦まし、学の魔の手から守ってくれたものの。

「彼が再び美夜を冷凍標本にしなかったのは、解凍された美夜は力を失っていたからです。彼はずっと――美夜がまた超常現象を起こすことを、待ち続けていた」

だから直美は。美夜に少しでもその兆しがある度に、引越しを重ねていた。

「土地を変えると、何故か美夜の不安定さはいつも治まりました。けれどどの場所でも、その土地に慣れた頃に、また同じような事が起き始めてしまう」

それでも今回はと。早過ぎた美夜の力の兆し――それは多分、沙夜と再会した影響だと、直美は目を伏せて口にして。

「彼もそれに気が付いたのでしょう。だからこうして、美夜を回収しにかかった」

おそらくは、直美が限界にきたタイミングを見計らって――

「じゃあ父は……私がこの町に来て、美夜と出会ったこと。知ってるってことですか？」

それでも沙夜は――彼の興味を惹かなかったという事なのだろうか。

「そうでしょうね。あなたが無事だったのは、本当に幸いでした」

「……」

黙り込んだ沙夜に呼応するかのように。

直美は突然げほっと咳き込み――苦しげに顔を歪めて、再び酸素マスクを口元に当てた。

「私があなたに今お話しすべき事は……もうこれくらいです」

沙夜の後ろで黙って話を聞いていた彼らは、それぞれの表情で直美を見つめる。

美夜が何処に連れていかれたか、研究所の所在まではわからないと。項垂れる直美に、沙夜は……決意を込めた目で、顔を上げた。

＊

「俺達側の発端はさ。久々に、俺が予知夢を見たことだったんだ――」
ガタガタガタと、舗装なき林道を走らされるコンパクトカーの悲鳴をものともしないで。
沙夜と薫、夜織を車に乗せた蛍は、出会い初日の真相を語り始めた。
「予知夢……？」
助手席の沙夜は、緊迫に満ちた目を少しだけ丸くしながら運転席の方を見る。
「夜織の花屋に、光り輝く女の子達が二人、迷い込んでくる夢。珍しく日時も覚えてる程、はっきりした夢で……勝手イメージで言えば、ゲームとかの精霊みたく光で出来てるような、本当きゃわいい子達と出会いがあるってさ」
こんな状況でも軽口を叩く彼だが、目は全く笑っておらず、真剣な顔でハンドルを握る。
隣の市との境になる山林を、近道と称して脇道に逸れ、信号がないのを良い事に飛ばす彼の運転テクニックは。バスの運転手を志すくらいなので、相当自信があるのだろう。
「本当にこの道で合ってるのか、蛍」
「えー、だってこの方角なんだろ、沙夜さん？」
「……」
こくりと、沙夜は力強く頷く。
―私……美夜のいる所なら、多分わかる―
今まで誰にも言わなかった、自分のその異常。
美夜を助け出す事に協力してくれるという彼らに、沙夜は躊躇わずに口に出した。
―警察への連絡は、おそらく無駄でしょう―
―身代金とか要求があればまだしも……もうあちらは目的は果たしてるからな―
彼らは全員、口を揃えてそんな風に言った。
美夜を誘拐した者の目的が、彼女の異常な力であると言うなら――攫われた証拠もなくそんな事を話しても、警察は本気で動いてはくれない。それは沙夜にも一応わかった。
―邪魔が入らない方がおれ達も動きやすい。能力者を甘く見た事、後悔させてやるよ―
そう言って薫は、手も触れずにぐにゃりと、鉄製のパイプ椅子を有り得ない形へと畳んでしてしまった。
しかもその後、そのパイプ椅子だった物を受け取った夜織が軽くそれを解いた時には。
沙夜はもう驚く事すらなく、ただ、
―……何で？―
と、表情を変えず淡々と口にしただけだった。
―薫兄と夜織は、能力の制御だけじゃなくて、身体の強度までいじっちゃえるんだよ―
蛍曰く、夜織はリミッターを外す程度だが、薫に至ってはまるで獣の如く変われるらしく、だから空間跳躍なんて荒業に耐えられるとの事だった。
――そうじゃなくて、と。沙夜は改めて、彼らをまっすぐに見て尋ねる。
―聞きたいのは……何で助けてくれるの？―
今ここに、当たり前のように共にいてくれる彼らに。それだけは尋かずにいられなかった。

そりゃー……と、沙夜がそれを尋ねる事を不思議がるように、彼らは顔を見合わせる。
—他人事じゃないですしね、僕達にとって—
夜織はちらりと直美を見て、硬い顔で言う。
—だって、沙夜さん、もうダチじゃん？—
—大体助けてと言ったのはあんただろう—
ふうーと呆れるように言う薫に、沙夜はまた少しだけ、カチンときた顔で、
—殺されるかもしれない事なのに—
自分の実の父が、実の母に手をかけた———
その残酷な事実を噛みしめるような、厳しい顔付きで睨むように彼らを見ていた。

……そんな空気を。あっさり覆してくれた天性の小悪魔が、後部座席で隣に乗る相手を今もからかっている。
—まあ気にするな。夜織なんて完全、惚れた女のためっていう私利私欲だからな—
—って、薫さんっっ！！！—
ずっと冷たい目だった彼に人間味が戻る。

厳しい顔ながら唖然とする沙夜に、
—美夜さんが大切なのは、沙夜さんだけではないのは本当です—
夜織は気まずそうに視線を逸らしながらも。はっきりと、強い口調で言い切っていた。

話を続ける運転席の蛍に沙夜は意識を戻す。
「とりあえずそれで俺達さ、光る女の子っていったい何者だって、大分ドキドキしながらあの日を待ってたんだけどさ」
出会ってみれば何の事はない。少女達からは確かに、能力のある者に特有の気配が漂ってくるのに、その全身の雰囲気は普通過ぎて。しかも二人は他人らしいのに、受ける印象が似過ぎていて、青年達は戸惑ったとの事だ。
「しばらく近くで眺めてれば、何の能力者かわかるかなーと思ったけど」
「今でも結局、正直よくわからないな」
双子というのは納得だがなと口を挟む薫に、
「薫兄にもわからないなんて、よっぽどだな」
神妙な顔で運転しながら頷く蛍。
薫には空間の跳躍や、パイプ椅子を歪めたような念動能力だけでなく、相手の本質まで時に見通す透視能力があるとの事だった。
そんな彼らの力の説明を道々受けていたら。やがて、沙夜の言った通り——一見はただのログコテージに見える、森の中の一軒家が、林道の先へと見えてきていた。

「……」
ついに本気で、こんな所に来てしまった。
沙夜の顔色はずっと厳しいままで、それは後部座席の夜織も同じだった。
夜織はずっと、緊迫したというより、ただ冷たい色の目をして——窓の外を眺めていた。
そんな彼が気になるのか、薫にからかわれていた時を除いて。
「美夜……絶対に、助け出すから」
沙夜はそう、覚悟を決めるかのように、同じ言葉を繰り返し呟いた。

「……ねぇ、夜織さん」
「――？」
少し遠い所に車を停めて、木々の陰に隠れてログコテージに近付きながら。
沙夜はふと、目の前をずっと先導していた夜織の背中に、他愛ない事をつい尋ねていた。
「美夜の何処が好き？」
ブフっ！　と。気配を潜めつつの行動なのに、思わず吹き出しかけた夜織が、一応マジメにきいている沙夜に。
「……今、するような話でしょうかねぇ」
困ったように笑いながらも、そのキッカケを話し始めてくれた――彼なりのあるがままに。
「美夜さんは……久しぶりに、心を読んだ人だったんです」
「――え？」
「僕は普段、この力は意識して封印してます。そうでなければ始終何処からか、誰かの声が常に響いて――気が狂ってしまう程なので」
……と沙夜は。笑ってくれているのに、目は冷たいままの夜織に改めて眉をひそめる。
「封印と言っても完全なのは無理で、相手の望む物を感じ取る力は残されてます。でも、声の方は――二度と聞こうとは思わなかった」
本当は誰かが望む物を感じてしまう事すら、苦痛なのだと示すように彼は目をふせ、
「けれど美夜さんからは、声が聞こえて……それも、全然、気持ち悪い声ではなくって」
人の醜い本性ばかりを覗いてきた彼にとって、それは、信じ難い奇跡だったのと。
最後の部分だけは、少しだけ幸せそうに、優しく夜織は微笑んでいた。
「でも。沙夜さんにバイトをお願いしたのは、美夜さんに会うためじゃないですよ」
「……」
そんなどうでもいい事までわざわざ言うのは、彼は沙夜のその心を感じ取っているのだろう。
沙夜が彼ら三人の事を――正直怖くもあるが。人生で初めて、信頼出来る友人と感じた事を。
「――お喋りはここまでだ」
一番先頭を行っていた薫から、作戦開始の号令が告げられる。
「おれは後で、内部の様子を視てから跳ぶ。沙夜を頼むぞ――夜織」
え。唐突な呼び捨てに沙夜が驚く暇もなく、
「……一度も行った事のない場所に跳ぶのは、危険ですよ、薫さん」
「だからじっくり透視して行く。心配するな、似たような事は何回かやってる」
そうして薫を一人、林の中に残して。
沙夜と夜織は今まで隠れていた木陰から、堂々と正面玄関の前に出ると――程無くして、拳銃まで持っている暗い色の背広の男達に、二人は囲まれていたのだった。

＊

――父とは直接、話をつける。
そう口にして一歩もひかなかった沙夜に、彼らはその勇気に半ば呆れながらも、
――むしろその方が確実かもな――
薫がそう言い、その後すぐさまにこの算段は練られた。沙夜を囮とする美夜救出作戦を。
父と対峙する沙夜のお供には夜織。内部の様子を窺って、警備装置や銃火器をこっそり念動で無効化した後、潜入するのが薫。
「だからってよー……俺はこんな所で一人、待機だなんてさー……」
ブツクサブツブツと、車の番人を命じられた蛍が林の中で一人ふてくされる。
「そりゃーうちの親の愛車だし？　俺が一番弱いわけだし。仕方ないんだけどさー」
沙夜さんについて行きたかったよー……と。
恨めしそうに、沙夜とメールをする携帯を見つめていた時の事だった。
「って……おおおお！？」
ぴるるる～と、沙夜のメールを告げる着信音。
今の彼女にメールをする余裕があるわけもなく、大いに驚き一人でのけぞった蛍は――
その新たな力となる存在の到来を、運命の糸を手繰り寄せるように鷲掴みにする。

一見は。一つの豪華な別荘にも見える程に広く大きく作られた、それ以外に変哲はないログコテージの、土台よりも更に下の方で。
木製コテージの地下にそんな空間が広がるとは信じ難い、いかにも化学研究所といった雰囲気の、高校の実験室にも近い空気を持つその部屋で。沙夜と夜織はいくつもの拳銃を向けられながらも、コテージの主との対面を果たしたのだった。
「何だね――何でわざわざ、こんな所にまで来たのかね、君達は」
大きな白い机を前に、何故か椅子には座らず携帯に似た物をいじりながら立っている男性。
科学者らしく色褪せた白衣を纏い、分厚い眼鏡をして若白髪のその男は、不可解そうにアポイントメントなき訪問者を一瞥する。
「まさかこのような僻地を見つけられるとは、それに関しては検討すべき価値があるがね。やはり大したものだ、双子というものは」
「――あなたが」
厳しく目を細める沙夜を、見ようともせず。基囲学――藤桜由穂と結婚後も、研究所では夫婦別姓でいた彼は、手前の机に目を落とす。
「そうだよ、生物学上は君と美夜の父親だ。最もそんな事実には、一円の価値もないがね」
一応夜織の事は、美夜の彼氏だからとして同伴の理由は作っておいたが……部外者への不審感や興味そのものがまずないようだった。
――この人……何か全然、私達とは違う人だ――
沙夜はもう既に。この目の前にいる男と、まともな会話は出来ない事を感じていた。
「美夜は何処――お父さん」
それでも父と口にするのは、彼女の覚悟だ。

自分は殺人者の娘であり、その現実からは、この先決して逃げられないのだと。
「やっと連れ戻したのに、教えると思うかね」
父と呼ばれる事に違和感すら持てない彼は、
「どうして――お母さんを殺したの」
沙夜の内面がどれだけ怨情に煮えくりかえり、呪うような心でそれを口にしているか。全く考える事も出来ないようだった。
隣の夜織はそれをまともに感じているのか、ずっと俯いたまま動かず声一つ上げない。
「君のその疑問こそ不可解だ。どうして私が、あの裏切り者を生かさなければいけないのだ」
そこで初めて、彼は少しは人間らしい怒りの感情を見せる。
「あれからどれだけ私が苦労したか、君らにわかる事はあるまい。力を失っていた美夜に研究予算は打ち切られ、辛うじてこの僻地に私財を投じて全ての設備は移したものの――再び予算を取りたいなら、異常能力の確証をよこせなどと、愚かな無学者に頭を下げ続け」
だから美夜の事も簡単には、組織の力を使い連れてくる事は出来なかったのだと――この十四年の見せかけの平穏の種明かしをする。
「十四年だよ。十年以上だよ君。そんなにも長い私の年月が無駄に費やされてしまった。君も私の時間をこれ以上無駄遣いさせるなら、あの裏切り者と同じ末路を辿るべきだね」
そうしてチャキ……と。警備員達だけでなく、学自ら銃を取り出し、沙夜の方へ向けた。
「……」
沙夜はその状況に、何の感情も持つ事はなく、
「私の事は……美夜と違って、必要ないの？」
あくまでただ、確認のために。
気付いてしまった自らの間違いを知るため、その荒涼とした問いを最後に投げかける。
「いや、君は役に立ってくれた。君のお蔭で美夜はまた力を取り戻したのだから」
学はにこりと――子供のような顔で笑った。
「平凡で、君自体に価値など全くないがね」
だから別に、いらないけどね――
その彼の純粋な笑顔と本心に。
沙夜は静かに、幼き日の過ちを受け入れた。
どうして自分が、親から捨てられたのか。――それって私の責任じゃないわけだし――考える必要は無いと答えは掴んでいたのに。
それでも、考えずにはいられなかった――――私が悪い子だから……捨てられたの？――
何か異常なところがあったから捨てられた。そうだったらどうしようと、沙夜は、誰かの孤独を見つめる度に怯えた。
普通とは少し違ったが故に――愛し合ったはずの夫からも拒絶された、養母のように。
養父は別に、これといって変な人ではなく。周囲の人から信頼されて愛されていた。
だから、悪いのは、異常者の方なのであり。

自分にはそんな真実が存在しないように――
きっと誰かに愛してもらえるように……。

異常を拒否しろと。自身に呪いをかけた。
―普通じゃなかったら――捨てられたのは、私が悪かったってことになっちゃう―

精一杯真っ当に生きなければ、自分は何も異常でない事を、自他に証明出来ないのだと。

不治の病に犯され、差し迫った命の期限を知った養母は、夫に懇願し。自分が死ぬまでという条件でやっと、人生でたった一つ――彼女の一番の望みだった子供を、養子という形で辛うじて手に入れた。

そこまでにならなければ、彼女には願いを叶えてもらえる権利はなかったのだ。

「……バカみたい……」

――世界のそうした、理不尽の数々を。幼い沙夜がどうしてわかる事が出来ただろうか。

「異常じゃないから、普通だから……だから捨てられたなんてアリ――？」

―こんな奴のいる所でだけは、泣くもんか―
沙夜はその自分への強い怒りだけで、何とか崩れ落ちそうになる体を必死に支えた。

――結局は。

誰かに愛してもらえたり、逆に受け入れてもらえない事に明快な理由はなく……それは多分、巡り合いという時の運が大きくて。
―自分がどれだけ迷惑か考えた事ないの？―
その真実こそ、沙夜はずっと怯えていたのだ。
だから胸を張れるように、真っ当に生きると、強くなるための答えをちゃんと掴んだのに。

―でも。それで大切な所、間違えちゃった―

異常だからと養母の愛を受け入れなかった、自分は何てバカだったのだろうか。

―本当は……大好き、だったのに……―
もう謝ることすら出来ない、青い目の誰か。

それでも……。

「――それはきっと。その人はわかってます」
ずっと無言で、沙夜の斜め後ろに立っていた夜織は。背後から沙夜の肩にそっと手をかけ。

沙夜が自らその心を思い出すように。
ほんの僅かだけ、背中を押したのだった。

―さや、と。

自分と同じ亜麻色の髪と、灰青の目をした女性達が自分の名を呼んだその声――

―おかあさんは……おかあさんにそっくり―
全然国籍も人種も違う、二人の女性。

しかし二人はよく似た髪の色で、目の色も二人共薄い方で……そして何より、沙夜を。我が子のように愛してくれたこと。

そうね、似ているわと――養母は沙夜に、嬉しそうに笑っていた事を思い出した。
―だって私もその人も。サヤの事が大好き―
そう言って自分を抱きしめる彼女に、けれど。
―でも……どっちもいなくなるんでしょ？―
幼い沙夜は哀惜を浮かべる。沙夜、許してと……ただひたすら泣きながら自分を抱き締め、いなくなってしまった灰色の目の人を。
どうしてこのタイミングで、そんな――
思い出しても痛いだけの心を自覚したのか。
「沙夜さんがその人に心を開けなかったのは――その人とは長くはいられないからですよ」
人の心を覗いた事を、悪びれもせず彼は言う。
沙夜はある一つの。
歎きのようなあの言葉を思い出していた。
―貴女は最初に愛した人とは生きられない―
人が最初に愛するはずの人。それはきっと、どんな人でもたった一人ではないのか。
―貴女はその人と、出会う事すら出来ない―
けれどもう。この世界にいないその母に、どれだけ望んでも出会う事は出来ない。
「……そう、よね」
たとえほとんど、その記憶が残ってなくても。
「お母さんを殺したお父さん……私は絶対に、あなたを許さない」
目の前の人間が肉親であっても、そんな事は根無し草として生きる沙夜には関係ない。
そう。根無し草というのは、それでも強く生きてきた沙夜には最大の褒め言葉なのだ。
「美夜は私が連れて帰る。あなたの好きにはさせない」
沙夜は顔をあげて、鋭く強い眼光で学の方を直視すると。
その答えを待っていたというように夜織も大きく頷いて、次の瞬間――
何故か。沙夜と夜織を囲んでいた警備員の男達の銃口は、全て学に向けられていた。
「うむ……？」
学は不可解そうにその異常な光景を見つめる。
「もう誰も、貴男を貴男とは思っていません」
銃火器は全て薫が無効化しているはずだが、学がそんな事を知るわけもないので、それは脅迫材料として十分なはずであり。
最早、洗脳の域にすら達する伝心能力――
相手に触れなければ複雑な事は出来ないが、学の方こそ侵入者であると警備員達の認識をすり替える位は。読心能力だけでなく、薫に沙夜の思念を伝えもした夜織には簡単だった。
「よくやったぜ。沙夜、夜織」
場に突然薫が現れ、この作戦で囮となる沙夜、実際に能力を使う夜織を労う。
警備員達を逆にこちらの手駒として、学を脅迫して美夜を解放させる。彼ら全員の脳に夜織が介入する時間は、沙夜が稼ぐ。

しかし、何か不測の事態があった時は薫が助ける――その約束だったので、薫が来たという事はその何かがあったはずだと、沙夜が表情を強張らせた時。

「そうかね。君達が能力者だったとは――」

学のその声は、逆に歓喜に染まっていた。

「それは何と――――」

嬉しく、都合の良い偶然なのだろうと。

そう呟き、ずっと持っていた携帯のような機械のスイッチを。薫の出現に沙夜達が気をとられている間にＯＮとしていた。

場に跳び込んできた薫は、学の前にあった白い机をきつい目で睨む。

「美夜はここだ」

その薫の怒りに、夜織もわかっているというように頷いて、

「解凍してもらわなければ連れ出せませんね」

ビリっと、机を覆っていた白い粘着シートを力任せに引き千切ると。

「うそ……美夜……！？」

その、机のような形で、天板がガラス張りの四角形の箱の中には。

屈葬されたような形で横向きに体を丸め、青褪めた姿で横たわる美夜が入っていた。

「不細工だとは思ったんだが……早速ここの機器に影響が出始めたから、急いで昔の形に戻したんだよ」

だから着のままなんだと、それだけ残念がるように、制服のまま冷凍された少女を見る。

沙夜は背筋が凍ったように顔色を青ざめ、

「――――」

薫も夜織も、あまりに怒りが溢れ過ぎて制御出来ないといった眼光で学を睨んだ――その次の瞬間の事だった。

「……！！？」

ごぼっと。突然夜織が胸元を掴んだ直後に、大量の赤い物が彼の口から吹き出し――胸と口を押さえながら彼は膝をついていた。

「夜織さん！？」

「夜織――！？」

沙夜と薫が駆け寄った先では、呼吸もろくに出来ない程に喉に血を絡ませた夜織が、

「――何だって！？」

薫の手を必死で掴み、その最後の意思だけは必死の思いで伝えると。

「！！！」

更に大量の血――心臓から吹き出したとまで思いそうな程の量を吐き出して。

力なく倒れ込み、夜織は意識を失っていた。

「能力を――使うな、だと！！？」

「夜織さん……！　どうして……！」

薫のように夜織から伝えられていない沙夜は、わけがわからず必死に夜織を助け起こしたが。

どんどんと顔から血の気がひき、様々な所で同じように出血が起きている事を、否応なく沙夜は悟る。

くくくくと、その様子を見て学は自らの研究の成果をはっきりと実感する。
「伊達に私も能力者の研究を続けていないよ」
薫は沙夜と夜織の前に立ち、学から庇うよう対峙したが。夜織が意識を失ったせいだろう、警備員達が我に返って慌て出し、再び銃口が彼らに向けられていた。

圧倒的優位に戻った学は、一研究者として楽しげに語り始める。
「うちの娘もそうだが、能力者が力を使う時、ある特有の脳波が高確率で認められる。私はずっとそれを研究し――外部から意図的に、それを増幅出来る装置を開発したんだよ」
その意味は、君達ならわかるだろう、と。
沙夜は勿論、全くわけがわからないが……
薫はぎりっと歯を食い縛って、血が滲む程に両手を握り締めていた。
「君達能力者は、必ず何処か、心身に負担をかけて能力を使っている」

「……！」
「程ほどの力なら、逆に一時的な身体強化が可能な者も多い。しかしこの装置は、君達の脳波と共振を起こし、それにより君達の力は――君達の中で制御不能の暴徒と化す」
「てめえ……」
それでもと学は、歪んだ微笑みと共に夜織を見ると、
「ここまでの状態になるとは、私も想定していなかった。どうやら彼は余程、強い能力の持ち主だったようだ」
「そ……んな……」
夜織でその状態なら、念動など更に物理的に作用する能力者である薫は――能力を使えば、どんな強い暴風が彼の中に吹き荒れるのか。
沙夜は知らず、するっと薫のジャケットを、彼の行動を遮るように掴んでいた。
「……」
薫はその沙夜の手の感触から。別に心なんて読めずとも、彼女が何を恐怖したかを察する。

沙夜は。とにかく彼を止めようと前に出て、
「やめてお父さん、みんなを傷つけないで！いらないのは私だけで十分でしょう！」
その破綻した叫びが薫にとって逆効果な事に、ついぞ気が付く余裕もないまま。
自分の前に飛び出した沙夜の肩に、そっと後ろから薫が手を置いた。
「――無駄だ。どうせアイツはもうおれ達に一目惚れしちまってる」
「薫さん……！」
振り返る沙夜に、何故か薫は穏やかに笑う。
「そうだね。平凡な娘はともかく、君達には充分研究価値がある。美夜と同様保存処置を施せば、しばらくは相当楽しめそうだね」
だから彼らは大丈夫だよ、と。
「今すぐ死ぬのは君だけだ、沙夜。安心してあの裏切り者の所に行くといい――」
そしてカチリと。沙夜に向けた自らの銃の引き金を躊躇いなくひいた学の。

「何だ――不発か？」
その隙に薫は、沙夜を突然強引に抱き寄せて、
「あんただけでも逃げろ」
驚いて声も出ない沙夜にそれだけ囁き。
「力を増幅してくれると言ったな――」
それならと、彼は不敵に微笑む。
「派手に、やらせてもらうぜ」

次の瞬間。
ゴゴゴゴと唐突な地鳴りが激しい音量で、地下の狭い空間を埋め尽くす程に大きく響き。
直後から地下空間を激し過ぎる振動が襲った。
その有り得ない事態に、そこにいた誰もが、床に這いつくばって必死に――天井や壁などあちこちから崩れくる瓦礫から身を庇う。
「――って、何だぁぁぁ！？」
「――！？」

地上のログコテージの前で、今まさに、中に突入すべく相談していた者達が驚愕する。
「蛍君、離れるんだ！」
「わかってるけど――おっさんも、こっち！」
何処に離れたら安全なのか、咄嗟にその目に視えた光景を頼りに、蛍は彼の手を引っ張りコテージから大急ぎで距離をとった。

今や、コテージは大きく傾くだけでなく、まるで地下から押し上げられているように、一階層分をせりあがっていく状態であり。
「薫兄……！？」
そんな事がもしも、可能だとしたら――その従兄以外には有り得ないと、彼は目を見開く。

――あんただけでも逃げろ。
そう言って自分を強く抱き締め、崩壊する地下室の瓦礫から身をもって自分の事を庇い。
「薫さん……！！　薫さん――！！」

叫んでもがく沙夜を更に強く抱き締める薫に、沙夜は――魂の奥底から、突き上げるような。
増幅された力の元、ある約束された衝動の……魂に直接呼びかけてくる声を聴いた。
その声に従って、たとえ自らの身がここで崩壊したとしても。彼らが助かるなら後悔はないと――ありったけの心でその身を委ねた。
――……思い出して……――
――沙夜、美夜……お前達は……――

そして地上に。ログコテージの台座として冷たい石造りの、半ば崩れ落ちた地下空間が城壁のように顕現して。
その状況に多数の人間が驚愕に目を見張る。
「何という事だこれは……！？」
「――気持ちはわかるけど、おっさん！」
茫然と呆ける男の背中を強く叩き、自らにも喝を入れるように両頬をバシンと両手で打つ。
「沙夜さん薫兄夜織、大丈夫か――！？」

現れた地下空間の崩れた壁の隙間から、後先考えずに中に飛び込んだ蛍が。
そこで目にした想定外過ぎる凄惨な事態に。膝をつかなかったのが不思議なくらいだった。

――カハ、と。

吐き出す血は少量で済んだものの、体中に、内側から裂けたような細かい亀裂が迸り。
革のジャケットをも引き裂く程に、強い力だったとわかるそれは……薫の全身から赤い血を無遠慮に流させると。
ずっと抱き締めていた沙夜まで、容赦なく真っ赤に染めて――力無く、彼も崩れ落ちた。

「薫兄――何――」

目を逸らすようにぐるっと周囲を見回すと、瓦礫に挟まれて倒れている敵側の男達と、
「って夜織！？　美夜さん！？」
全く生気を感じさせずに倒れている二人にも否応なく気が付いた。

「何でみんな、何があったんだよ――！？」
おそらく薫の采配で瓦礫からは守られたが、上半身を血で染めて倒れている弟分と。
先程まで彼女を閉じ込めていた箱が壊れて、それでも冷たく固いままで横たわる美夜。

そして――薫が倒れ込むのを無言で見届け、俯いたまま両膝をついて。力なく両方の手をだらりと下げている沙夜の姿に。
「えっ……沙夜さん！？」
駆け寄った蛍は、沙夜の両肩を掴もうとして、
「――あちっ！」
その内から湧き上がる、高濃度の――普通の人間は感じない純粋な力を目の当たりにして。
今度こそ茫然と、彼は理性を手放していた。

さや……と、自分を呼ぶ懐かしい声が、全てが崩れ去っていく挟間で聞こえて。
幼い誰かが優しく強く沙夜の手を引っ張り。

沙夜は、この物質世界に住む存在としての、人間の自分に。惜しむ間もなく別れを告げた。
―あなたはきっと……ヒトの……―
小さな沙夜が沙夜に手を振る。その子は誰か、哀しそうな顔をした女の人と一緒にいて――
誰かに手を引かれながら、沙夜に笑いかける。
―ヒトの、あるがままを助ける精霊―
元素（エレメンタル）の申し子。そう口にしてから、女の人は小さな沙夜を愛しげに抱き締めていた。
―でもそんな事は、関係はないのね―
女の人は、喜んで彼女を抱き締め返す少女に、精一杯の思いを込めて伝える。
―愛なんて……道具だと思っていたのに―
ただ、自らの研究を続けるため、都合の良い相手を生涯の伴侶に選び、都合の良い子供を得たはずだった彼女は。
自分を純粋に求める無垢な幼い命達を前に、己の罪深さと。これまでの過ちの源を知る。

私は、多くの人間を傷付けてしまった。
夫と共に、幾人もの能力者を実験してきた女は今更だと知りながら。これ以上の犠牲を増やさないために、我が子の救出だけでなく——夫の社会的失墜をも目論んで行動に出る。
そのこれまでの研究資料は全て、実の姉に預けた。姉はそれを盾にして女の娘を守るが、夫の方も長い時間をかけて姉を蝕んでいく。
—沙夜。きっといつか、迎えに行くからね—あなたが生きてる内に、私が罪を償えるとは思えないけれど——離れる事を不安がる娘を安心させるために、女は優しい嘘をつく。
—だから、いい子にしているのよ……誰も、あなたの利用価値に気が付かないように—本当にそれだけが、女の最後の心配だった。
それ程に異常な何かを秘めた少女に——愛しているわ。女は最後にその子達に伝えた。
そして。
明るい色の髪をした女性が沙夜の前に立つ。
—思い出して—
女性は沙夜に、キレイな笑みを向けて伝える。
「思い……出す？」
今沙夜の心を占めているのは、ただ二つの事。
鮮血に染まった誰か達の姿と。
冷たく固くなった大切な誰か。
—あなた達の力なら、彼らを助けられる—ただしと。女性は困ったように愛しげに笑う。
—それをすれば、あなたは人間でなくなる—それはきっと……あなたを滅びの道へ導くと。
だったら——何なの。誰かの最後の願いを振り切るように、首を振って顔を上げる少女。
——迎えに来た、と。
自分の名前を呼ぶ声と自らの切なる望みに。沙夜は強く頷いて、その黒い手を取った。
「沙夜さん——……！！」
必死に少女の名を口にし、迫り来る自壊を知るかのような誰かが伸ばした手の先。
ふっと顔を上げた少女の周囲から、目映い光が立ち昇った。
「——！」
それこそ彼が初まりに視た、あの明晰夢の光。
少女を真っ白に照らし上げ、秩序を持って展開される光の円陣は次々と直径を広げる。万物を補う根源の『素』で現世を織り上げる。
そして光はもう一人の少女を取り込んで。性質を知る『元』の下、現世の綻びを原形へ推し戻す。少女一人では一時の幻であっても。
補い戻す事で、ようやく幻想は現実となる。
何よりも遠く——誰よりも近い二つの奇跡。元素という同じ名を持つ二つの魂が織り成す、夢に似た白い光が、場に満ちていった——

＊

青い目の誰かが。彼女を現世に贈り還した。
目が覚めた時――
自分を覗き込みながらぽたぽた涙を落とす誰かに、少女はしばらく視界がぼやけて。
何がどうなって、自分がいったい誰なのかすら。その声を聞くまで、思い出せなかった。
「沙夜さん……！　――お姉ちゃん……！」
慣れない様子ながらも、事情を知ったのか自分を姉と呼んで泣いている双子の妹に――
「美……夜？」
まずその名前から最初に思い出して。
沙夜はばっと、朝に少し仮眠をとっていた家族用のベッドから強い勢いで起き上がると。危うく、目前の美夜と頭をぶつける所だった。
「お姉ちゃん――！」
良かった……！　とすかさず美夜が抱きつく。
「あれ――ここ、病室？」
それも多分、先畑直美が緊急入院をした個室。
昨日から容態が急変して、入院したはずの直美だけでなく、他にも沢山の見知った人が広くない個室を暑苦しく埋めながら。全員が沙夜を心配そうに見守っているので。
「夢じゃ――ないのかな」
朝の仮眠の中でもなくて、まして死んだ後の世界でもない。そちら側に行ってほしくない人達の姿と、行っているはずのない、そしてこの場にいるはずのない人の姿があったので。沙夜はまずその不思議が気になってしまった。
「狭間さん……どうしてここに？」
「沙夜君。本当にすまなかった」
狭間陽平。沙夜の後見人を引き受け、そして自ら養父の立場をも引き受けた、正体不明の彼が。直美のベッドと平行な家族用ベッドの足元に立ち、扉に近い場所に立った青年達を背に、沙夜を見ていた。
生きている。
美夜も自分も、そして薫や夜織、蛍も。
それを一目で確認出来た沙夜は、その事が一番気にはなるものの――
「私は君を、囮にしていたんだ。それなのに――君を守る事が出来なかった」
本当にすまなさそうに口にする狭間さんに。
沙夜は、はい……？　と、そちらを先に、話の続きを聞かざるを得なくなった。
「狭間のおっさんは刑事なんだよ。一時期は生活安全課にいて俺も世話になったんだよな」
彼の後ろにひょこっと顔を出した蛍が、何の気なしにそんな事を言って笑う。
「沙夜君のＰＨＳも無断で使わせてもらった――君達を探すためとはいえ、すまない」
突然、沙夜のアドレスから蛍に「狭間だが」と謎のメールが入って、蛍はそれはびっくりしたのだと大真面目に語った。

沙夜の行方を追うため、手がかりを求めて狭間さんはメールの履歴を見た所、見知った名前の「葉月蛍」が表示されており。それに彼はそのまま返信をしたという。

「私が囮って……どういう事ですか？」

沙夜を探すだけなら後見人として、そこまで不思議な出来事ではないが。

しかしその不穏な単語は、刑事という彼の正体を知って、聞き逃す事は出来なかった。

「基囲学は妻である藤桜由穂を殺害し、更に他にも人体実験を行っていた疑いがある――そうした密告と、この資料が送られてきてね」

狭間さんが取り出したそれは……藤桜由穂と署名の入った、何かの記録のようだった。

「基囲学には双子の娘がいて、彼はその娘も実験材料にしようとしているが、先の殺人や実験を含め、この資料以外の物的証拠はない。だから彼の娘をマークし……守ってほしいと、この方から直接相談をいただいたんだ」

狭間さんは、ベッドの上で座り、成り行きを黙って見守っている直美を見て言った。

「直美……さん？」

「沙夜さん……危ない目に合わせて、本当にごめんなさい」

直美は俯き、沙夜の目を見ずに項垂れた。

「私はずっと、基囲学を、この資料の存在で脅迫する事で美夜を守ってきました。彼から美夜を育てる援助金を得るためでもあり――実際にこれを警察に委ねた場合、彼の属する組織からの報復を恐れての事でもあった」

その危うい均衡の上に成り立った平穏は。

もしも学のバックにある何物かが、本気で美夜を狙い始めれば容易に崩れるとしても。

「でも個人的に、長年この事を相談していた狭間さんから、沙夜さんを見つけたと聞いて――私が美夜を守るのも限界だったこの体で。私はやっと、戦う事を決意したんです」

そして狭間さんは沙夜を自ら引き取り。

それまでの後見人から、この子は実の父に命を狙われている、だから養子先の人選には注意するよう――申し送りを受けたのだった。

「参ったな……本当に迷惑な養子ですね、私」

沙夜はそう――穏やかに笑いながら、助けてくれて有難うと口にして。狭間さんと直美は目を丸くし、扉近くの夜織が溜め息をついた。

「沙夜さんは人が良過ぎますよ。直美さんに利用されたも同然なんですから」

けれどもそれは、あくまで学の現行犯逮捕のためであった事もわかっている彼は。それと知りつつ、何も言わなかったと後に語る。

「父はもう、捕まったんですか？」

「ああ、警備員も含めてね。何故か全員――重傷の状態から無傷に戻った後で」

あの、倒壊しつつ地上に現れた地下空間を思い出して。狭間さんも硬い表情をしながら、今後も君達の事はフォローするから安心してくれと、沙夜をまっすぐに見て言ってくれた。

重傷の状態から無傷に戻った。
死にかけていた大切な人達を、取り戻した少女は――不思議ですねとだけ嘯いていた。
「全く――異常な出来事もあったもんだな」
自分の事は完全に棚に上げている、口の悪い青年を沙夜は笑って睨み返す。
「お姉ちゃん――みんな。助けに来てくれて本当にありがとうございます」
涙混じりでありながらも、心から嬉しそうに笑ってくれた少女に、沙夜もつられて微笑み、やっとそこで彼女は新たな自分を受け入れる。
自分をここに連れ戻してくれた青い石を胸に。
―忘れないで。貴女は沢山の愛に逢う―
―きっといつか、迎えに行くからね―
その声があまりに優しかったから……今も、そして明日も、沙夜は信じていける気がした。
今度こそ。私は絶対、幸せになれると。

――何であんた、あそこまでしたんだ？
あの後彼は、珍しく神妙な顔付きをして。
彼の命を引き換えにする覚悟で傷付けた、沢山の人間をも救う奇跡の光となった少女に。
少女が平凡な人間に戻れた後に、そう尋ねた。
それは自分の台詞だと、少女は微笑み返し。
―ただ、そうしたかったから……何でなんてきいても仕方ないじゃない？―
大切なものが大切である事に、理由はきっと沢山あるだろうが。その境界は特に考えない……そんな心を少女はいつも大事にしている。
理由という鎖で、互いのあるがままを縛って――歪めてしまわないように。
いつからそうで、どうしてそうだったのか。
それは多分、彼もきかれても困る事だろう。
―つまり天命でしょ。どうしようもないわ―
そう、いたずらっぽく笑って答える沙夜に。
おかしな奴と、薫は儚い顔付きで笑っていた。

そしてその。一ヶ月は後の閑話であるが。

長年、自分を守り育ててくれた先畑直美のささやかで静かな葬儀が終わって。

何とか喪主を務め切った美夜は、その後もしばらく、悲嘆から逃げるようにバタバタと忙しくしていたものの。

「これで今日からわたし達――『藤桜』です！」

そう言って嬉しそうに、沙夜と自分の新たな住民表を、今度から住み込みで雇ってもらうバイト先の店主に確認してもらっていた。

「色々手続きお疲れ様です、美夜さん」

「先畑のままでいるか、藤桜にするか、凄く悩んだんですけど……やっぱりお姉ちゃんと一緒がいいですし」

その彼女の、嘘のない自然な葛藤と結論に、安心したように店主――番夜織は微笑む。

「美夜さんは本当に、正直な人ですね」

そうして沙夜の方に、改めて振り返った。

「それでは、藤桜沙夜さん、それに美夜さん。しばらくよろしくお願いしますね」

「夜織さん……本当にそれで良いの？」

沙夜は黙々とボックスフラワーを作りながら、顔を上げて物好きな雇い主に尋ねる。

藤桜の姓になるために、狭間さんの養子でなくなった沙夜は、美夜と二人で暮らす事を決めはしたが。そのために、美夜に残されたお金をいきなり大きく使うのも不安であり。

「うち、二階は全然使ってませんでしたし。バイト代が家賃で良いなら助かるくらいです」

美夜には主に配達要員でいてもらうとの事で、今まで通り他のバイトも続けるという美夜に、沙夜は少しだけ、心配で頭を抱えるのだった。

そして、沙夜と美夜の少ない荷物を二階の大部屋に運び終わったある日の事。

「ちわーっす、夜織！　住みに来たぜー！」

そんな謎の言葉を口にしつつ、二段ベッドを手土産にやって来た無法者の姿があった。

「……は？」

さすがの彼も、呆然という顔でその訪問者を迎えて。沙夜と美夜が間借りする事になった大部屋の隣、物置だった部屋を勝手に整理し、二段ベッドを組み上げてしまった葉月蛍に。

厳しくその一言だけはハッキリ伝えた。

「今月から大掃除は月二回にして、バイト代から家賃にしますからね」

「えーっ、冷てー！　薫兄と二人で泊まりに来るのに、俺だけそんなのアリ！？」

「薫さんも……来るの？」

蛍のその言葉に反応した沙夜に、どうしてか蛍は少し面白くなさそうな顔をしながら、

「もう既に来てるぜ。全く、俺にだけ片付けさせてくれちゃってさ」

二段ベッドの上、いつからそこで寝転がっていたのか、よっと手だけを振る無頼漢。

貴方達ですねぇ……と、呆れる夜織の後ろ。沙夜と美夜はポカンとした目で顔を見合わせ……同時に、大きく笑い出したのだった。